

「昔は会社の夢をよく見られた?」

「辞めた当時はね、いやなことばかり。あんまりいい思い出はないんです」

健一は膝の上で軽く指を組む。

「僕は人から一流と呼ばれる大学を出て、それなりの会社に就職しました。そして、挫折しました。よくある話ですね」

だから人は多くを聞きません。分かるよ、大変だっただろう、田舎でゆっくり人間らしく暮らせばいいよ、ってね。僕も敢えて口を開けなかつた、他人に理解してもらいたいとは思わなかつたし……。入社した会社に、同じ大学の先輩がいたんです。三十過ぎていました。とても頭の切れる人で、ばりばりの営業マンだったとか。でも、交通事故に遭って頭を打つたのが原因で記憶力が悪くなつたと、人の話ではそういうことでした。窓も電話もない資料室と呼ばれる部屋で、彼は一日中一人でぼつんと何かを読んでいた……

健一の夢 2

「最近も週刊誌でそういう部屋を見ました」 健一は言った。

「そこは、僕がいた会社よりもっとひどかったです。真夏の東京で、窓もクーラーもない狭い部屋に、十名ほどの中高年男性が詰め込まれていました。電話もない、仕事もない。モルモットですよ。狭いケージに詰め込まれて、一匹ずつ死んでいくんです。人間であることを殺されていくんです。」

僕がいた会社の資料室は、その先輩が一人だった。どっちが残酷なんだろう。交通事故に遭う前は、将来の幹部候補だと言われていたとか」

資料室の先輩が気になりだしたのは、入社して半年ほど経つた頃だという。

「僕にはこの仕事、向いてないんじゃないかと思ひ始めてからですね」

気がつくとき、時おり先輩の部屋を覗いている自分がいた。彼はいつも生真面目な表情で本を読んでいたり、新聞の切り抜きを整理したりしていた。それは本人以外にとって、何の意味も見出せない行為だった。手にしている本は、健一が見る限りいつも同じ経済書だったし、完成したスクラップブックは、暮れなると焼却炉に捨てられていた。

健一は疲れていた。頭痛、肩こり、背中の痛みがしばしば重なって、あるいは交互にやつてきた。

「ある朝、突然に起き上がれなくなつたんです。鳴っている目覚まし時計を止めるのが精一杯で、ベッドから動けない。寝返りを打とうとすると眩暈がして、猛烈な勢いで世界が回り出したんです」

いくつかの病院で、いくつかの病名が付けられた。眩暈が治ると呼吸が苦しくなり、それが治ると不整脈始まつた。眩暈の発作から三ヶ月後に、健一は会社を退職した。

「退職日に、先輩の部屋まで挨拶にいきました。先輩は、赤

線がいつぱい引かれた経済書から顔を挙げて、立ち上がった握手してくれました。それまで挨拶すらしたことがなかったので、僕が誰かなんて分からなかったでしょう。でも、笑顔で見送ってくれました。人が訪ねてきたことが、単純に嬉しかったようでした」

健一は、何かに押されるように喋り続けた。

「頑張ってください、と僕は言いました。後になって、ずいぶん失礼なこと言ったと後悔しましたけど。でもその時僕は心からそう思ったし、言いながら、涙が零れそうになって困りました」

妹から砂漠の夢の話聞いたのは、その頃だという。

「信じられないことに、僕はそれまで全く忘れていたんです、妹と一緒に何を見て何を望んでいたか」

健一の夢 3

面接を終えて、健一の父親が経営しているコンビニエンスストアの前を横切る。カウンターの中に、年配の男性がいた。多分、父親だろう。スーツを着たら銀行の融資窓口が似合いそうな、眼鏡をかけた長身の紳士だ。「先生、先生……中山せんせい」角を曲がったところで呼び止められて振り返ると、健一の祖父、芳造だった。

「先生とは、こつでもしなくちゃ話せねと思ひましてね、こつやっつてゆつくり歩きながらいいですから、ちょっと話を

聞いてもらえますか。迷惑ですかね」

息子である健一の父親が長身なのに比べ、芳造は絵里よりも背が低い。

「歩きながらでよろしいんですか」

絵里は立ち止まる。

「うち帰るの遅くなったら申し訳ねえから」

冬だといつのに芳造は鼻の頭にうつすらと汗をかいて、本当に申し訳なきそうに言う。

「じゃあ、ゆつくり歩きますね」

そう言つと、芳造は安心したように絵里に並んだ。

「先生、こつ言つたからつて、へんなふつに思わねでもらいてえだけ」

芳造は遠慮がちに口を開く。

「俺は、普段は人様の話を立ち聞きするような人間じゃねえだけ……。今日は美知子さんもいなかったし、悪いと思つたけど、廊下でちょっと話を聞かせてもらった。もう年だし、耳もよくねえから、そんなには分からねえ。だけど、孫にも人に言えねえ色んなことあつたと思つたよ」芳造が絵里を見上げる。

「こ心配のお気持ちは分かります」

「先生、おら、孫がああなつたのは、息子たちのせいじゃねえかと思つてるだ」

「こ両親ということですか？」

「ああ、息子夫婦だな、息子が悪かつたんだが」

芳造は立ち止まった。

「健一はよく神棚に拜んでた、お父さんとお母さんが喧嘩しませんがよつに、お母さんが泣きませぬよつにとな。オラそれ見るたびに、今日こそ息子を殺して自分も死ぬか、孫のためにと思つたもんだ」

コートポケットから丸まったティッシュを取り出して、芳造は目の縁を拭つた。

「その頃はまだうちの婆さんも生きてたから、息子達とは別々に暮らしてただよ。だから息子んちがそんなになつてると知つたのは、だいぶ経つてからでな。孫たちには可哀想なことした」

健一の夢 4

「そんなに争いごとを？」、「ああ、息子は嫁にまいんち手え上げてたしな」

「アル中でな、今じゃ一滴も飲まなくなつたが、そうなるまではうちんか地獄だったあ。ほんとにあんときは、息子と心中するかと思つただよ」

「そんなことが……」今の父親からは想像しがたいが。「だからオラ、孫たちがあなつたのは、息子のせいだと思つてる」

芳造はそう繰返した。

幼い健一は、父母の間に入ってよく父親に謝つていたといふ。お父さんごめんなさい、ごめんなさい。僕が悪かつたら、お母さんをいじめないで。その泣き声が忘れられないと、芳造はまた涙を拭いた。

「妹の方はあんなふうになつちまうし」

「お亡くなりになつたとか」

「先生は聞いてるかどうか、商売やつてるから詳しいことは身内のものにしか話してねえが、自殺しただよ」

「そうでしたか……」何となくそんな気はしていたが。

「先生そんなわけで、可哀想な孫だで、どうかよろしくたのみます」

芳造は、改札口で絵里を見送つた。そしてまた、深いお辞儀をした。

電車に乗つてから、絵里は溜息をついた。

こちらも飲酒か。

絵里もまた、寛の飲酒トラブルには、何度か付き合わされてきた。自分たちに子供がいないのは、幸いだったのかもしれない。

例えば寛は今、絵里の実家とは絶縁状態になっている。酒席で起こした兄とのトラブルが原因だった。

いつ頃からか、酒量が一定量を超すと、寛は底無しに飲むよつになつていた。絵里が一緒の時は、気を配つて量をコントロールしていたのだが、その時はたまたま急用ができ、席

を外している間の出来事だった。

茶の間に戻ってみると、兄嫁と子供たちは席を外して、人だけが硬い表情で俯いていた。

寛の目は据わり、顔面蒼白になっていた。

「どうしたの？」

絵里の言葉に、

「こいつを連れて帰れ、そして二度と来るな」

兄は言い捨てて、蹴るように席を立つた。

「寛さん、悪く取らないでね。身内だから、いろいろと心配もするんだよ……」 母がおろおろと言った。父は眉間にしわを寄せて、煙草を吸い続けていた。

健一の夢 5

暗く冷えた玄関に足を踏み入れると、居間の電話が鳴っていた。「もしもし、絵里、あんた、ダンナ帰ってきた？」

あわてて受話器を取ると、メグミの声が飛び込んできた。

彼女だけには、寛が出ていったことをその日のうちに、電話で知らせていた。

「まだ」

「まだって、あんた何落ち着いてるのよ、警察に知らせた？」

「子供じゃないんだから心配いらない、って言ったのはメグミじゃない」

「えっ、あたしそんなこと言った？」

「はつきりと、面倒くさそうにね」

「そうだったけ、ごめん。あん時はトメに用事言いつけられて焦ってたから、あれから考えたんだけどね、やっぱし、一応届けておいた方がいいんじゃないの？」

「夫が友達に、私への伝言を残していったのよ。居場所も教えてもらったから、大丈夫だと思う」

伝言を残した相手が、以前の浮気疑惑相手、河村流子で、寛のいる所が、最終の夢というわけの分からない場所であることは黙っていた。「で、あんた迎えに行くの？」

「まだ分かんない、考えてるよ」

「そうよね、無責任よね。絵里が働いてて経済的に困らないからいいよつなものの、心配しないで下さい、って書き置き一つで出られたんじゃないよ、たまったもんじゃないよね、身勝手もはなはだしいわ」

「冷却期間かも。お互いこのまま一緒にいいもんかどうかが、きちんと考えなくちゃ」

「色々あったからね、絵里たちも」

「まあね……」 絵里は溜息をつく。

「あたしさ、今、仕事の用で近くまで来てるのよ、これからそっちへ寄っていい？ ちょっと聞きたいこともあるし」

改まってメグミが言つ。

「いいけど、食べるもの何にもないよ、今帰ってきたばかり

だし、一人だから冷蔵庫からっぽで」

「何年つきあつてるのよ、絵里に手料理なんて期待してないつて。デパ地下で買出ししてくるから、手洗って待ってけ」
いつもスマンね。メグミの口癖を真似ると、受話器の向こうで楽しい笑い声が響いた。

そしてひとしきり笑った後で、

「ねえ絵里、佐藤健一って人、知ってる？」

彼女は意外な人物の名前を口にした。

健一の夢 6

「こんばんわー」 一時間後に、メグミが大きな紙袋を抱えて入ってきた。

「全く、相変わらぬ殺風景なおうちだこと」

何の装飾品もない3DKの団地住まいをぐるっと見渡してから、ああ重かったあ、とメグミはキッチンテーブルの上に紙袋をどさっと置いた。

「今日は時間なかつたから中華にした、これで我慢してね」

シユーマイにギョーザ、肉まん」

「ええー、がっかり。期待してたのに」

「うっそお、エスニックだよ。知り合いの友達がやつてるお店からテイクアウトしてきたんだ」

メグミはにっこりと笑いながら、次々とバックに入った料理を大げさに取り出した。

「まずは、ベトナム風生春巻き。定番だね、われらの。このタレはおいしいんだよ。ピリカラ加減がちょうどいい。はい、お次はバイナツプル炒飯。甘くてフルーティーだよ。そして、えびといかそうめんのエスニックマリネ。トッピングの揚げタマネギと揚げニンニクは別に持ってきてあるよ。かりかりして歯こたえ最高。仕上げのデザートは、ほれ、絵里の好きなココナツプリン」

どーだ、とメグミは、テーブルに広げた料理の前で得意そうに両手を広げた。

「わーん、嬉しいぞー」

絵里も大げさにメグミに抱きついていく。

「わざわざ遠くまで買いにいってきたんだぞ」

「ありがたいっす」

さっそく食べ始める絵里を、メグミはいつものようにあまり食べないで、楽しそうに見ている。

「あれだね、いつも思うけどさ、絵里を慰めるには言葉はいらないね。食い物だけでいい」

「メグミは幸せそうに食べる人の顔を見るのが好きだから、あたし達っていいコンビだよ」

絵里はにっこりと笑ってみせる。そしてデザートのココナツプリンまで、綺麗に食べ終えた。

「あーあ、またダイエツトだよ」

絵里は箸を置き、

「ダンナに逃げられて落ち込んでると思った？」

スカートの中のホックを外しながら訊くと、

「少しくらいは食欲落ちていいるかと……」　メグミは苦笑し、でも安心した、と呟いた。

それから待っていたように、絵里の目を覗き込んで言った。

「で、ほら、電話でも話したけどさ、佐藤健一って、絵里の知ってる人？」

健一の夢　7

電話でもそうだったが、親友であつても、事務局から依頼されている面接に関しては何も答えられない。絵里は曖昧に笑うしかない。「佐藤健一がもし絵里のカウンセリング相手だったら、答えられないよね、守秘義務ってやつか。だったら何も言わなくていいから、ちょっと聞いてて」

彼女が今日、手土産に持ってきてくれた、エスニック料理の店に勤めている女性の話だという。

「頭がいいみたいで、きつちりと話ができるし、とても綺麗な子よ、ケイコちゃんっていうの。四捨五入すると三十歳もうばあでーす、とか言つたさ。どーよ、最近の若いねえちゃん……。そのケイコちゃんが昔、付き合っていた彼氏の名前が佐藤健一。彼女は少し変わっていて、固有名詞に拘るのね。柳橋小学校一年一組の時の担任はヨコヤマエイコ先生で、さつき食べたお菓子は〇〇製菓の海苔ピーパックだ

とか。話には、よくフルネームが出てくるの。で、ケイコちゃんも二十歳の頃に付き合つた恋人、元カレの名前が佐藤健一ね。それが予備知識よ、ここまで分かつたでしょ。」

メグミは絵里に断つてから立ち上がり、冷蔵庫を開けて缶ビールを取り出した。

「絵里も飲む？」

絵里は首を横に振る。

「そこはデパートの同僚たちとよく行くお店なのよ。ケイコちゃんも同僚の一人の友達ね。たまたま遅くまでその店で飲んでいたら、勤務時間が終わつた彼女が合流したつてわけ。あたし達のお遊びで、テーマを決めて熱く語りあつて朝まで討論会つてのがあつてね。で、その日のテーマが、へも一度逢いたい昔の恋人。そこでケイコちゃんが佐藤健一を語つたの。彼女の話には、元カレの近況という付録があつてさ、最近の彼は心を病んでいて、自宅でカウンセリングを受けているらしいというじゃない。」

ケイコちゃんは、話の中に固有名詞を出す子だから、元カレのフルネームから、住んでいる町の名前まで分かつたつてさ。普通だったら聞き流すだろうけど、たまたまこの前、絵里がうちに泊つた日つて、面接済ませた後だったでしょ。

その時聞いた町の名前と彼女の言う、佐藤健一の住まいが同じだったのよ。それにあの時絵里に、面接相手はまたお年寄りかと聞いたら、あんだ、青年だつて答えたでしょ。だから

珍しいなあつて印象に残つて覚えてたわけ。

それに、彼女の話自体もね、何となく絵里に聞いてもらいたいような内容だったのよ。」

健一の夢 8

そんな前置きの後で、メグミは語つた。ケイコと健一は、大学時代に友達を通して知り合つた。健一は人目を引く顔立ちに似合わぬ内向的な性格で、異性との付き合いもあまりないようだった。

付き合い始めてすぐに、健一がとても誠実だと分かつた。いや、誠実すぎた。例えばある時、デートの時間に遅れそうになつて、ケイコはタクシーに乗つた。しかしそれが悪く交通事故に巻き込まれ、何と二時間も遅れてしまつた。まだケイコを待たない頃だったから、連絡も取れない。当然、健一はもういないだろうと、それでも待ち合わせ場所に行つてみると、何と彼はまだ待つていた。そして現われたケイコに、笑顔で言つた。遅かつたね。

彼は決して怒りの表情を見せなかつた。いつも少し目を伏せて、困つたような顔をするだけだった。それが少し歯がゆくて、ケイコはわざと彼を怒らそうとしたことがある。

待ち合わせに二時間遅れても待つていた彼は、いつたい何時間待ち続けていられるのだろうか。試してみよう。そこでホテルのロビーで待ち合わせして、離れた場所から隠れて見

ていることにした。

ケイコは健一からは死角になる、少し離れたソファに座つた。陰から見ている間中、彼は同じ場所に座つて、本を読んでいた。時々疲れたように本から目を離し、ケイコを探すようにあたりを見渡し、時には腕時計に目をやった。そしてまた、本に戻つていく。

二時間は普通に過ぎ、三時間が経つた。ケイコの方が限界だった。

「ずいぶん遅かつたねえ、今度は何があつたの?」

ようやく現われたケイコを、健一は氣遣つたのだつた。

「なんで怒らないのよ。」

どうしてか、ケイコは泣けて仕方なかつた。

「僕は人を怒れないんだよ、そういう感情がブロックされているのかもしれない」

彼は、自分をそんなふう語つていた。

ケイコはしだいに、健一との間に隔たりを感じるようになってきた。彼といると、苦しくなつた。それは、彼の持つている性格、少し過剰ともいえる優しさばかりではなく、実は、性的問題からきていた。

健一とは肉體関係がなかつた。恋人同士が普通にするような行為が全くないわけではなかつたが、彼は決して最後の一线を越えようとはしなかつた。それは彼女にしてみれば、いかに不自然と思えた。

そのことについて、ケイコは何度か話し合おうとした。けれどもどうしてだろう、健一を前にすると、用意していた言葉がすつと引いてしまうのだった。

健一の夢 9

ケイコは、健一をホモセクシャルと疑ったこともあったが、それは見当違いのようだった。考え抜いた末、彼女は都内のホテルに部屋を取った。クリスマススイブの夜だった。「あなたの本当の気持ちを知りたかった」

健一に、そう言った。

彼はケイコの気持ちを受け入れた。けれども彼が受け入れたのは、気持ちだけだった。

健一はずつと不能のままだった。一晩一緒にいて、ケイコに分かったのがそれだった。

明け方近く、彼女に背中を向けて、健一は声を殺して泣いた。

「気にしないで」

ケイコはその背中に言った。

「こうなることが怖かった」と、健一は言った。「きつとこつなるんじゃないかと思ってた」

彼はこちらに寝返りを打った。

「親がセックスするの見たことあるかい？」

ケイコは黙って、首を横に振った。

「僕は子供の頃に何度か……」 そう言うと、健一はまた背中を向けた。

「断酒会に入って今では社会復帰しているけど、その頃、父は飲酒の問題を抱えてた。そういう人間が一人いる家の中つていうのがどういふものか、例えば僕が今ここで、言葉を尽くして喋っても、分かってはもらえないと思う。」

思いきり息が吸えるのは、父が眠っている間だけだった。父が家において酒を飲んでいる間、僕はずつと息を止めて死んだ振りをしてた。そういう気持ちで過ごしていた。

母はよく顔にアザを作っていた。大きなマスクをしているのを見るたびに、胸が潰れそうになったよ。妹は自分のカラに閉じこもって、あまり喋らなくなった。守ってやらないと、母は父に殺されてしまうと思つたから、僕は父の様子が怪しくなると、なるべく母から離れないようにしていた。すぐに二人の間に入っていけるように。

僕は何度も母に、父と別れて頼んだ。今に殺されるよと。でも、母は父から離れなかった。それどころか、そんな夫婦なのに、彼らは時々夜になると一つの布団の中で重なつてた。僕はいつも父の顔色を窺っていたから、両親の行動には敏感になつてた。

母が苦しそうな声を出したんだ。その声が闇を通して聞こえてきたんだ。また苛められているのかと思つて、僕はあわてて両親の寝室に飛び込んでいった。

そんなふうにして、僕は男と女のことを知った。

健一の夢 10

高校時代に、恋人ができた。互いの想いを伝えあい、彼女の手を握って、キスをした。でも、そこまです。そこから先に行こうとすると、母の声が聞こえた。僕が時々、夜中に聞いていたあの声だ。僕は引き裂かれるんだ。愛情と憎しみ、怒りと悲しみが、目の前にあるどんな感情よりも強くなって、僕を押し潰す。僕は、押し潰される……。大学に入ってから、きみと知り合う前に付き合ってた子がいる。同じだった。すぐに別れた。だからきみとここまで続いたことに、僕は感謝している」

一睡もしないまま朝が来て、ケイコと健一はホテルの前で別れた。クリスマスの朝だった。

「ごめんね」

別れ際、健一は言った。ケイコは言葉が出なかった。

それから今まで、別れたままでいる。

「以上がケイコちゃんの話よ」 メグミは言い、グラスを取り上げてビールを一気に飲み干した。絵里は缶に残っているビールを、空になったグラスに注いだ。

「これまでで最強の朝まで討論会だったわ。彼女にとっての佐藤健一は、へもつ一度逢いたい昔の恋人なんだって。もつみんなシンとしちゃってね。ケイコちゃんはその後何

人かの彼氏と別れたけど、佐藤氏だけは特別で、今でも時々切なく思い出すって。彼と付き合っていた時は若かったから、何となくそのまま別れちゃったけど、今だったら別れなかったかもしれない。そう思ったら急に気になって調べたんだって。それが付録ね。

元カレ近況調べ、その一。佐藤健一はまだ独身。その二。彼は何年も前に会社を辞めて実家に帰り家業を手伝っている。その三。妹が最近自殺している。その四。彼も鬱傾向にあつて家でカウンセリングを受けている。

そんなマイナスだらけの近況だから、佐藤健一は逢いたいと思うだけの相手でした。となるのかと思ったら、やっぱり彼女は若いわね。私は佐藤健一とこれから連絡とってみるつもりです。もう一度やり直してみたい、だって。

どう？ これまでの話。心当たりある人だった？」

メグミの問いに答えず、絵里は立ち上がって冷蔵庫から新しい缶ビールを取り出した。

「あたし、もついらないわよ」

メグミが言う。

「私が飲むの」

絵里はなぜか、飲まずにはいらなかった。

健一の夢 11

健一との四回目面接日だった。この一週間で、本人以外

のところからずいぶん多くの情報が入り込んでいた。

両親の不和、その原因となっていた父親のアルコール依存症、そして妹の自殺、過去の恋人、その別れの原因となった彼の性的な問題、そんな知識が、これからの面接の妨げにならなければいいと思う。

絵里が健一から言葉を引出そうとしたのは、最初の二回だけだった。三回目の面接からは、ほとんど相槌だけになっているのは幸いだった。

今日の健一は、久しぶりに妹の夢をみたといい、子供時代の思い出話をした。

「僕と妹は年子です。僕たちには小さい頃から、特別な繋がりがありません。二人で力を合わせて、外界の理不尽なことから身を守っていたのです。僕は、二人で勇気を出し合わなければ潰されてしまつような、そういう環境にいましたから。」

それが当たり前だと思つてきたのですが、中学生くらいになると、自分たち兄妹は少しおかしいんじゃないか、周囲とは違う、繋がりが深すぎると思つようになりました。

それで僕は、意識的に妹から離れました。幸いにも、僕には勉強がありました。それはいろんなことをシャットアウトするのに、とても都合のいいものでした。一石二鳥です。僕は現実から離れられ、いい成績を取ることで他人からの賞賛が得られた。

そうして妹は取り残されました。彼女は中学に入った頃から学校を休みがちになって、高校には進学して何とか卒業しましたが、頑張りもそこまででした。

一方、僕はすっかり普通の学生になっていました。いい成績を取つていい大学に行くことだけを考えるようになり、妹のことは、だらしなくて軟弱な奴ぐらいにしか思えなくなつていきました。

妹は一人で家にこもり、いつも絵本を描いてました。絵と童話です。僕にはとうてい書けないような器用な絵でしたが、専門家から見たらどうだったんでしょう。今はもう見ることはできません。死ぬ前に、書いたものは全て、日記や手紙の類いも全部処分してありました。

妹にはあれがあつたから、あそこまで生きてくれたんだと、彼女が死んだ後に分かりました。と同時に、妹にはあれしかなかったとも分かりました。

妹が本当に助けを必要としていた時に、僕は彼女を切り捨てていたんです。

僕はとても大切なものを切り捨ててきた。妹の死がなければ、それが分からなかつたなんて。」

健一の夢 12。「僕にとつて、妹はとても大きな存在でした。僕は彼女に助けられて生きてきた。恥ずかしい話ですが、僕は、兄である僕は、妹に慰められて生きてきたんです。」

僕は小さい頃に一時期、不眠症にかかっていたことがありますが。明るくならないと眠れないんです。

僕は暗闇が嫌いです。闇は音を通します。音は僕を怯えさせます。僕は妹のベッドに入って、妹に抱きしめてもらっていたんです。

(お兄ちゃん大丈夫だよ、安心して眠って)

僕より年下の、身体の小さい妹が、僕の背中をとんとん叩いてくれたんです。そうしながら彼女は眠ってしまします。僕は闇を通して音を聞くまいとして、彼女の寝息に耳を澄ませます。その寝息に自分の呼吸を合わせます。自分にも平和な眠りが来ますようにと願いながら。

反対のこともありました。妹はめつたに泣きませんでした。が、その代わり、泣き出すと際限なく泣き続ける子供でした。一晩中泣き止まない妹のベッドに入って、その背中を抱いてやっていました。

(もう泣くな、もう泣くな)

僕はまどろみながら、ずっとそんなことを言っていたような記憶があります。

僕は小さかったから、世の中の、そこに生きている人間のいろいろなことが分からなかったから、妹にはずいぶん残酷なことを言ってしまったのです。

一生泣かなくても済むように、泣くだけ泣かせてやれなかったことを、今ではとても後悔しています。

二回目の面接の時、僕と妹は安心して眠れる場所が欲しかったです、と健一が言っていたことを思い出す。この青年はずっと、長い孤独の中にいたのだと、改めて絵里は思う。「妹が最後に書いていたのが、砂漠の絵でした。自分の見た夢をヒントにして描いた絵本でした。」

△砂漠の眠り姫 確かそんな題名の絵本でした。砂漠の中で眠りつつけて、砂嵐に埋まってもまだ眠りつつけている姫のお話でした。何百年か後に掘り出され生きかえる、輪廻というか再生の願いを込めて描いていたものだったんですね、彼女が死んだ後で分かりました。健一の言葉に、絵里は何かひっかかりを覚えた。そしてそのひっかかりには、覚えがあった。

そうだった。初めて健一と面接したその日に聞いた△砂漠の夢という言葉に聞き覚えがあったのだ。自分は以前どこかでそれを聞いている筈と首を傾げながら、絵里は健一の家を後にした。

健一の夢 133 メグミから電話があった。「その後どう? ダンナのことでなんか情報入った?」

「変わりなし」

「毎度おなじことはっかり言って申し訳ないけどさ、なんでそんなに落ち着いていられるの?」

言われるまでもなく、絵里にも自分の気持ち分からないでいた。

「落ち着いてないよ、ただ眠いだけ」

寛がいなくなった当初はそれなりに心が乱れて眠れない夜もあつたのだが、日が経つにつれて、なるようにしかならな
いと思つよつになつていた。

そういう心の変化がどこからきているのだろうと、心の隅
で思わなくもないのだが、考えよつとするとなぜか眠くなる。
そんな時は寝る。眠ればまた、一日が終わつて朝が来る。絵
里はただそんな風に、毎日をやり過こしていた。

「寝てばかりいるつて、あんたそれ鬱病じゃないの？ 商売
にならないじゃない、鬱病同士で向かい合つてたんじゃ」

「そうかもね」

メグミに言われて絵里は苦笑する。

大げさな溜息が、受話器を通つて聞こえてきた。

「よし分かつた、緊急指令。明日、会社終わつたらこつちに
出ておいで。いつかの話、佐藤健一とやらの元カノ、ケイコ
ちゃんが働いているエスニック料理のお店でこはん食べよう。
あんたごうせ一人じゃ、ろくに食べてないんでしょ、おいで
おいで」

メグミがファックスしてくれた地図を片手に店のドアを押
すと、独特の香辛料の匂いが鼻についた。

メグミは窓際の席に座つて、こちらを待つていた。

「悪いね、呼び出しちゃつて。もうコース料理頼んであるん

だ」

彼女が手を挙げると、エスニック柄の長い巻スカートをは
いた女性が、ミネラルウォーターを運んできた。すらりとし
た長身の美女だつた。

「ケイコちゃんだよ、こつちは絵里」

その紹介に、ケイコは丁寧に頭を下げて、

「アンドウケイコです、はじめまして」

にっこりと微笑んだ。

「ケイコちゃん、急で悪いね、時間大丈夫？」

「はい、さっきオーナーに頼んできましたから。お食事が終
わる頃に休憩入りますから、そしたら、こちらのテーブルに
伺います」

健一の夢 14、前に来た時、あたしの友達で

心理カウンセラーがいるつて話したら、是非あつて話してみ
たいつて言つたよ。あんたちょっと、彼女の話を聞いてやつ
て、ケイコが持ち場に戻ると、メグミは言つた。

「何度も言つけど、私の仕事は相手の話をきつちりと聞くだ
けで、アドバイスとかはしないのよ」

「分かつてるつて」

「それに、こつちにもそれなりの心の準備つてものが必要だ
し」

「そんなたいしたものじゃないのよ、雑談程度に聞いてやつ
て」

「そんな、急に言われても」

「ダンナに逃げられた部屋で、一人ぼつんというよりましてしょうが」

そう言われれば、絵里に返す言葉はない。

「それに、今日のこはあたしのオゴリだから」

とどめだ。絵里は仕方なく頷いた。

食後のコーヒーを飲み終わった頃に、コーヒーポットを持ってケイコがやってきた。

「お代わりいかがですか?」

ケイコは二つのカップにコーヒーを注ぐと、そのままメグミの隣に腰を下ろし、

「二十分くらいいしかないんですが」

腕時計を見ながら、すまなそうに言った。

「じゅんばんよ、急な話なんだから」メグミが言う。「絵里にはこの前の佐藤ナントカという人のことは話してあるの。何でも相談してみれば?」

「はい、佐藤健一です。すみません、お言葉に甘えてしまつて。こんな個人的なことをべらべらと喋っている自分に、全く抵抗がないというわけではないんですが」

「いいのよ、カウンセラーってのは、そういう個人的な人に話せないような内容の話を聴く人のことなのよ、ねえ、絵里」

「うん、まあ……」絵里が言うと、ケイコは膝の上で手を

揃え、すみませんと改めてまた頭を下げた。

「先日、佐藤健一の父親がやっているコンビニエンスストアへ行って来ました。カウンターの中にお父さんがいました。多分、お父さんだと思います。アルコール依存症で荒れていた人のように、とても見えなかつたんですが」

そこまで話すと彼女は、ちよつとすみませんと席を外し、水の入ったグラスを手にあわてて戻ってきた。

「ごめんなさい、やっぱり緊張して喉がカラカラになつちゃつて」

〜 健一の夢 15 〜 翌日、時間を変えて、またそのコンビニエンスストアの前まで行ってみたんです。そして今度は彼が、佐藤健一が店に出ていました。鬱の傾向があると聞いていたから、やつれて変わってしまったかもと覚悟もしていたんですが、相変わらずとても綺麗な人でした。少し痩せましたが、遠くからでも輝きが見取れるような澄んだ瞳をしていた。それを見て、ああやっぱり私はある人が好きなんだと……。勿論、それだけではないです。私が好きだったのは、そして別れた今でも彼に惹かれるのは、きつと彼の持つ過剰な優しさだったのかも知れない。中途半端な優しさは多くの人が持っていますが、あれほどの人は、私が知る限り、彼だけでした。

彼が肉体関係を持たないのに苛立つて、私は他の男の人と寝たこともあつたんです。しかも、彼が私の部屋に来ると分

かっているその時間に、男と私はベッドの中。コンパで飲んだ勢いで分がなくなってしまうと、後でそんな言い訳をしました。そんな私でさえ、彼は許したんです。

自分が、どうしてあれほどまでに残酷になれたのか。まるで別の人格が飛び出して、暴れていたように思えます。ずいぶん都合のいい自己弁護のようですが、正直、そんなふうに感じています。もともと自分の中であって眠っていたものが、目覚めただけのことだったのでしょうか。

時が経つほどに、私は彼をどれほど深く傷つけてしまったかと、自分の未熟さを後悔しました。そして、ずいぶん色々なことを考えました。

私が愛してる彼の優しさは、いったいどこからくるのだろう。私にはそれが、彼の生まれ持ったものだとは思えませんでした。

彼は問題を抱えた家庭の中で、徹底的に傷つけられて生きてきた。そんな環境にいたから、自分を傷つけるというのが、彼が生きていく上でのパターンになってしまったのではないのでしょうか。

例えば何かを選択する時、人は自分によかれと思つた方を選び取るのですよね。でも彼は、自分が傷つくように、苦しむようにしか選べないのではないか。私が愛した彼の過剰な優しさというのは、実は、彼が自分自身をとことん苛めぬいていた結果ではないかと。

彼が私に示したのは、彼が身につけてきたパターンだったんです。自分が愛した彼の優しさが、実はそういうところから来ていたと思つと、私は、とてもいたたまれない気持ちになりました。私は彼に、痛みしか与えられなかったのですから。きつと彼は、今でもそうなのでしょう。

～ 健一の夢 16 ～ 「専門家の人にこんな話して恥ずかしいです」 ケイコは照れたように、水を半分ほど飲んだ。

「メグミが何と言ったのか知らないけど、私は、人の話をできるだけその人のそばに立つようにして聞くだけのこと。それ以上は何も」

「はい、それはうかがってます。ですから個人的なご意見を、出来ればお聞かせいただけませんか」

ケイコは残りの水を飲み干して、ハンケチで口の隅を拭いた。

「佐藤健一と別れた時は若かったから、彼が、その、不能とというのはとてもショックでしたし……。でもそういうのは、原因によって色々な治療法があるみたいですし、あまり大きな問題ではないような気がするのです。あくまでも、私にとつては、ということですが。そしてこれは妄想のような話になってしましますが、例えばこれから先にもし結婚とかがあつても、体外受精で妊娠だつてできますし。」

もし彼とやり直せるならば、私は昔の私と違って、彼を理

解できる。今の私なら、痛みでなく、その正反対にあるものを与えられそうな気がする。そして何より、彼を好きだといふこの気持ち。私は、この気持ちを大事にしたいと思うんです。

私の言っていること、間違っていますか？」

「好きだといふ自分の気持ちを大事にしたいと？」

絵里は思わず苦笑した。寛との結婚に反対された自分が、兄に対して放った言葉と同じだ。

（自分の価値観を押しつけないでよ。何が大切かなんて、人それぞれみんな違うんだよ）

（じゃあお前は何が大事なんだ、言ってみろ）

（好きだといふ気持ちだよ）

そんなやりとりが、はつきりと思い出されてくる。そして、二十年経ってこの日まで。いつときの気持ちに流された結果、結婚生活はほぼ三年で破綻し、後は惰性、夫は家を出て妻はこんなところで他人の恋愛話に耳を傾けている。

「はい、私は好きな人を大事にしたいし、自分も大事にされたい。そんなふうに生きたいです」

ケイコの言葉は強くてまっすぐだ。

「佐藤健一に連絡をとってみてもいいでしょうか、明日にでも逢いたい気持ちなんです」

彼女の中で気持ちは固まっている。誰かに頷いてほしいだけなのだ。

「もしも私があなたなら、そうですね、彼に逢いたいですね」

でも私はあなたではないから。

絵里は心の中でそう続けた。

絵里の夢 1

ケイコの店を出て家に戻ると、留守電にメッセージが入っていた。実家の母からだった。以前から腎臓が悪くて入院を繰返していた伯父の死と、その葬式日程を知らせる電話だった。伯父とはあまり行き来がある訳ではなかったが、一度は夫婦で顔を出すようにと父から言われて、半年ほど前に寛と二人で病院へ見舞いに行っていた。

葬式となると夫婦揃ってたろうなあ……。 絵里は溜息をつく。夫の不在を何と言おう。

翌朝、実家に電話を入れて葬式には自分一人の出席だと告げると、

「なんでまた……」 母は何かを察したようだった。

「ちよつと留守にしているのよ」

絵里が口を濁すと、

「寛さん、仕事は？ またやめたのかい」

言葉尻が突き刺さってくる。

「まあ、そんなと」

絵里は溜息をついた。どうせすぐ分かることだ。

九十歳近い高齢ということもあり、伯父の葬式はほとんど親族だけのものだった。なるべく人と顔を合わせないようにと、足早に葬儀会場を出ようとしたところで、絵里は兄に呼び止められた。

「おい、帰るのか」

「これから用があるから」

「ちよつとだけ、うちへ来い」

有無を言わさぬ調子で、兄は言った。

実家は十年ほど前に改築して、兄の家族四人と両親が一緒に暮らすようになった。多くの家と同じように母と嫂も折り合いが悪く、同居以来、実家に帰ると必ず、母から愚痴を聞かされるようになった。絵里の足が実家から遠のいたのは、そのせいもある。

茶の間には酒が運はれてあった。台所に行って肴の用意をしている義姉を手伝おうとすると

「いいからお前はこつちへ来い」

兄が顔を出して絵里を呼んだ。

「寛はどうしたって？」

絵里が座ると、すぐに父が切出した。

父と母と兄の中に入っていくと、いつも圧迫感を感じる。

絵里は黙って俯いた。

この年になっても、元の家族とこんなふうに向かい合つて逃げ出したくなる。何か言おうとすると、言葉が喉の奥で絡まってしまう。

「また仕事やめたんだって？」

父は重ねて訊いてくる。

絵里の夢 2

父の言葉に、絵里は黙って頷いた。

「寛の転職は何度目だ」

「……… 忘れた」

絵里が答えると、元家族はしばらくの間、黙り込んだ。

「今は何してるの」

口を開いたのは母だった。

「どうせまた酒飲んでぐうたらしてるんだろ」

呟くように、兄が言った。見れば、コップ酒を手にしてい

る。

「何で寛は来なかった」

父が言った。

「うちにいないから」

「どこ行ったんだ」

「分からない」

絵里が答えると、茶の間はまた沈黙に包まれた。

「だから………」

言いかけて、父は一つ咳払いをした。そして煙草に火を点けて、何度かせわしなく吐き出した。

父が何かを語る時は、とても時間が掛かるのだ。他の三人は昔からの習慣で、次の言葉を辛抱強く待つている。

やがて灰皿に煙草が押しつけられて、父はまた大きく咳払いをして、そのまま少し咳き込んだ。

「お父さん、煙草の本数を減らさない」と

背中を軽く叩きながら、母が言う。

「なに、けむりは肺の奥まで入れてねえから、ふかしてるだけだからな」

これもまた、この夫婦の間で何十年も繰り返されてきた会話だ。

「おい、言いてえことあつたら、早く言わねえか」

黙って酒を飲んでいた兄が突然大声で喚びたかと思うと、手にしていたコップ酒の残りを、向かいにいる父に浴びせかけた。

母はびくつとして父の背中から手を離し、父は面喰らったように目をしばしばさせて、前髪にかかった酒を手で振り払った。

母が父にタオルを渡す。父はそれで顔や肩を拭いた。まるで、雨にでも濡れたかのように。

兄はよくこんな真似をするのだらうか。残っていた酒が少量だったから良かったものの。父母の反応を見ると、こ

れが初めてとは思えなかった。

「どうしました？」

兄の大声を聞きつけて顔を出した義姉が、タオルを手にしている父を見て、溜息まじりに兄に言った。

「あなた、もうお酒はやめて」

絵里の夢 3

義姉は、兄の手から空のグラスを取り上げ、傍らの一升瓶を持って居間を出て行った。「おい」

その背中に兄が声を掛けるが、義姉は振り向かなかつた。

「おい、それ持つていくな、待て、おい……」しかし、台所はひっそりとしたままだ。

「ちつ、ばかにしやがって」

兄は拳でテーブルを力任せに叩いた。小皿が引っくり返って、醤油がテーブルの上を流れる。

父は手にしていたタオルをその上に載せ、台ふきん代わりにした。そうしたままで、落ち着きなくまた幾つかの咳払いをした。今ここで起きたことが消えてなくなり、仕切り直しが出来るともいふように。

「早く話を始めねえか、じじい、いつまでそつやって辛くせえ顔してやがる」

兄がまた声を上げる。

「おい、酒持つてこい」

そして母に命令する。

母は黙って立ち上がり、部屋を出て行った。

「だから、お父さんは」

ようやく、父が声を出した。

「おまえがああ男と結婚したいと言った時、反対した。でも、誰にも迷惑かけないと言っから、仕方なく許した。それを今になって後悔している」

ああ男、とは……。結婚して二十年も経つというのに、この家における自分の夫、寛の位置がこれか。

「誰にも迷惑かけてないよ」

絵里は心える。

子供が出来なかつたから出産前後の世話になることもなかつたし、絵里が働いているから、金銭的な援助をしてもらつたこともない。愚痴もこぼしていない。

「親を心配させるだろう。いつまで経つても落ち着けないでフラフラして」

人の心配より目の前の息子の心配をした方がいいのにと、絵里は思う。あるいは現実を目を瞑りたいのだろうか。

兄はいつ頃から、こんな酔い方をするようになってしまったのだろう。最近はお前家から遠ざかっていた上に、兄を何となく避けてもいたから知らなかつた。

「遠くの心配より、近くの心配した方がいいよ」

絵里は、息を荒くして上体をふらつかせている兄を横目で

見ながら言う。

「どこにいたって子供は心配だ」

父はこちらの皮肉に気がかめ振りをする。

絵里の夢 4

「別れる」兄がまた声を上げた。「もうあんな男、顔も見たくねえ」そして台所にいる母に声を掛ける。

「おい、いつまでやってんだ、早く持つてこい」

母が爛徳利を運んできた。猪口を端に寄せてグラスに酒を注ぎ、兄は半分ほどを一気に飲み干した。

「寛さんは、あなたに何にも言わないで、出て行っちゃったつてことかい？」

そんな兄をちらつと見やつてから、母が不安げに口を挟む。

「別れ話をしてたのかい？」

絵里は黙つて首を横に振つた。

「お前がバカだからだ、あんな男に引つかかつて。子供がいないんだから、ぐすぐずしてないで別れちまえ、明日、離婚届にはんこ押してここに持つてこい」

「そんな、おまえ、急に言われても絵里だって考えることあるし……」そんな母の言葉を無視して、

「お前は結婚前にオレに何て言つたか覚えてるか」

兄の声がしだいに大きくなっていく。酒臭い息に、絵里は顔を背けた。

「おい、絵里、オレの声が聞こえねえのか」

これが兄の本性が。あつちもこつちも、酒に吞まれて自分を失っている。もう見たくない。こんなところにいたくない。帰ろうと立ち上がりかけた絵里に、猪口が飛んできた。

「ためえ、逃げるのか」

兄は中腰になった。

「あなた、いい加減にしてちょうだい」

義姉が入ってきて、兄の袖を引いた。

「うるせえおめえは黙ってる」

兄は妻を押しつけて恐ろしい形相で睨みつけ、拳骨でテーブルの上の皿や小鉢を乱暴に押しつけた。酒が零れ、料理が飛び散る。義姉が叫ぶ。

目の前の惨状に、父はむやみに煙草をふかし、母は目を伏せているばかりだ。これがあなたたちの幸福だったのかと、心の中で絵里は父母に問う。

地方公務員として定年まで勤めた無口な父と、専業主婦の母にとつての幸福とは、他人の賞賛だった。だから常にトップの成績を取り続け、一流大学、一流企業と進んだ兄は、彼らにとつては幸福そのものだった。

この兄が、幸福の姿なのか。

「自分の姿を鏡でよく見るといいよ」

絵里は座り直して、正面から兄を見据えた。

「何だとお、もつ一度言ってみろ」

兄は唇を震わせた。

絵里の夢 5

両親の幸福そのものだった成績優秀な兄には、友と呼べる人がいたのだろうか。記憶を辿っても、家に兄の友達が遊びに来ていたことはないし、兄もまためつたに外出はしていなかった。勉強は机の上で出来るけれど、人間関係は人間の中でしか学べない。そんな兄が社会人として組織の中で、人を動かせるのだろうか、絵里は以前から不思議に思っていた。

「最近、うちのガリストラされるんじゃないか心配になってきたわ、今のところそういうのはないみたいだけど……もしかしたら、窓際あたりに追いやられてるんじゃないかな」少し前に義姉がそう呟いていた。兄の酒量が増えたり、こんなふう荒れたりするのは、そういうところにも原因があるのかも知れない。

「お互い酒のみの亭主を持つと苦労が多いわね」

そんなふうにしたこともあった。その時は、まさか兄がこんな醜態をさらしているとは知らずに、義姉の苦労なんてたかが知れていると、内心思っていたのだが。

絵里に離婚を命令し、酔った勢いで小鉢や皿を引つ繰り返した兄は、そのままテーブルに突っ伏している。

義姉は無言で、畳の上に飛び散った料理や酒を片付ける。父

は黙って煙草をふかし、母は目頭を押さえて鼻を嘔っている。
「帰るわ」

今度こそと絵里は立ち上がった。

「分かったか、離婚届、必ず持って来とけ」

兄がふらふらと顔を挙げ、血走った眼で絵里を見据えた。

(こんな家に二度と来るもんか)

絵里は心の中で言い返し、兄を睨み返した。

「なんだてめえ、その目は、言いてえことあるんだっつら言
つてみるってんだ」

兄は片手をテーブルに乗せて、立ち上がるうと立膝になる。

「あなた、もうよしなさい」

義姉が叫んでその腰にしがみつく。ただでさえ腰がふらつ
いている兄は、その場に尻餅をついて転がった。

「いいかあ、ただじゃおかねえからなあ」

絵里さん、と義姉は、部屋から出ていくように目配せをし
た。

亀だ。裏返しになった亀。自分の力じゃ起き上がれないく
せに、空威張りばかり。

部屋を出ていく時、両親が望んできた幸福の末路を、絵里
はもう一度振返った。

絵里の夢 6

義姉は自分を取り繕ったり、他人の迷惑を気にかけるのが

少ない人だ。そうでなければ、とうにこの家から出て行った
ことだろう。兄たちは職場結婚だった。

「女はやっぱり顔ですよ、これは女親に似てくれてよかった
と思つてね」

両家が初めて顔合わせをした日に、義姉の父親は開口一番
そう言つて、

「うちの娘は、こう言つちゃあなんですけど、あんまりこっ
ちの方はよくないんですわ」

自分の白髪頭を叩いて笑つた。

「だけど、お宅の息子さんみたいなエリートに選んでいただ
けて、こんな嬉しい事ないですわ。ま、こんな娘ですがひと
つよろしくお願いしますよ」

娘は玉の輿に乗つたと思つていらしかった。

帰り際、彼は娘が嫁ぐ家の庭をゆつくりと一巡りし、松の
木の前で立ち止まつて、しばらく見上げていた。そして、ち
よと庭にいた絵里を振りかえつて言ったものだった。

「この松は立派なもんですなあ、売ればいいいくらぐら
いの値がつくもんですかな」

悪気はないのだが、義姉の一家は何事につけ、思つた事を
ストレートに口にする人たちだった。

一方、絵里の両親は、人前で感情を出すことも、出される
ことにも、抵抗を示す方だった。そんなに違つ者同士が同居
してうまくいく筈がない、最初から分かつていたのにと絵里

は思う。

母がよく引き合いに出すのが、初めて義姉の実家を訪問した時のエピソードだ。

「結婚相手の親が初めて来たっていうのに、昼のごはんが鯖の煮付けだけとは、いくらなんでもねえ……。お父さんは鯖を食べると蕁麻疹出るから、味噌汁と漬物だけ。二つ三つ麩が浮いたぬるい汁に、漬物だったってスーパで売ってる黄色い沢庵、うすつべらに切ったのが三切れよ。山盛りのごはんを前に箸取ったけど、どうしたもんかと思っただわ。それにしても常識外れなうちで、もう二度と行きたくない。開いた口が塞がらなかったもの」。そういう家に育った娘だからと、母の話は現在の義姉への愚痴に繋がっていく。

「わたしが風邪ひいて寝てるここに、お母さん夕飯どうしますか、と聞ぎに来るさ。ご飯は食べられないって言ったらじゃあ後で果物でも持ってきてまじょうか、って。ミカンなんて持ってこられたってあんな酸っぱいもの、喉が痛くて食べられやしない。おかゆでも作るって気は回らないんだよ」

絵里の夢 7

母の話は、聞いていただけで気が滅入ってくる。家の中で日常的に繰り広げられる感情の行き違いなど、聞きたくはない。鬱陶しい。親孝行のつもりで、絵里は母の言葉を聞き流しているのだ。じっと我慢しながら。メンタルケア事務局

の面接のようにはいかない。自分の心の中には、母のために開かれた場所など何処にもない。ただ、不快感に満たされていくだけだ。四十歳過ぎたいい大人がと思っただが。

母と義姉は、表面的には、それなりの関係を保っているように見える。それは母がいい姑を演じているからだ。表立っては愚痴も文句も言わずに、会社勤めの嫁に協力している。

料理好きな母は、家族全員の前で「飯と高校生の孫の弁当作りをしている。同居を始めた十年前に自分が作った習慣なのだ。それが負担になると愚痴を零すから、やめたらと言っ、それは出来ないという。

「何でできないの?」

「だって……なんて言えばいいんだい」「ありのままを言えばいいじゃない」

「そんなこと出来ないよ」

繰返した。そして愚痴が始まる。

「この前の大雪山時、雪かきで肩痛くしちゃってね。お父さんは膝痛くて出来ないし、うちじゃ雪降ったって誰も片付けるもんいないから、せめて門から玄関までの通り道は作っとかないと……。冬の朝は寒いから肩痛くてね、包丁持って下向いてるとずきんずきんしてくるんだわ」

「寝てればいいじゃない」

「じゃあ誰が朝飯つくるんだい、弁当だって作らなくちゃいけないし」

「ねえさんにやってもらえばいいでしょ」

「ぎりぎりまで寝てるんだもの……」「だから、言えはいいでしょ、肩が痛いから寒い間は頼むって」

「ゆっくりやればできないこともないし……」「ここでまた話は振出しに戻る。

だったら私に言わないでくれ。

絵里は心で呟く。

「わたしから言おうか、ねえさんに」

「いいよ、やれるだけやってみるから」

「じゃあ、あんまり我慢しないようにね」

同じだな と絵里は思う。

昔の母はいい母親を演じ、その期待に応えられない絵里が悪者だった。絵里はそう感じていた。そして今の母は、いい姑を演じて義姉を悪者になっている。

絵里の夢 8

普通の母と娘というのはどういうものだろうか。十代二十代の頃、絵里はよくそんなふうに考えた。四十代の今になっても、母親に対して親しい感情が持てないでいる。思春期は親に反発していても、年齢を重ねていくうちに、理解でき共感していけるものだろう。

メンタルケア事務局に所属して、様々な人からの話に耳を傾けるにつけても、自分は平凡に育った部類だと思う。しか

しそんな普通の環境にいても、様々な思いの中で過ごしてきた。

絵里が母に対して抱く一番大きな感情は、後ろめたさだった。母と向きあっていると、自分が何か悪い事でもしたような気持ちになってくるのだった。

「お兄ちゃんは……なのに、どつしてお前は」これが母の口癖だった。

「お兄ちゃん、ランドセルを置いたらまず宿題を済ませたから」

という理由から、母は居間に小さな卓袱台を出して、絵里の帰宅を待っていた。

「お兄ちゃんは何でも自分で出来ただけど、この子は言わないとしないから」

と、母はその卓袱台の向こうで、絵里が宿題を済ませるまで座っていた。

「お兄ちゃんみたいに一生懸命に勉強しないから」

テストでいい点数が取れない。

「お兄ちゃんみたいにやりさえすれば」

同じようになれるのにと、いつも母は言っていた。

「お兄ちゃん、は九十点だと悔しそうな顔をしていた」

と言われていたから、七十点以下のテストペーパーは、学校帰りに破り捨ててきた。

「何でもいいから何か一つ、一番になれるものがあるといい

んだけどねえ」

誰に言つともなく、母はよくそんなふうに言っていた。いかにも理解に満ちた母親のように。しかし、絵里には分かっていた。母が関心を持つのは、学校の評価という一点に絞られていた。

生徒が百人いれば一番から百番まで成績順位がつけられ、運動能力も測定されて、数字となって現れる。遅刻、忘れ物、宿題提出、クラブ・生徒会活動の全てに明確な評価が加えられる学校という場所は、目に見え、形に表れるものが全てだった。

母が何でもいいから、という時の「何でも」とは、学校で評価されるもののうちの何かだった。その中で一番になれる人間は、選ばれた人達なのだ。絵里は思っていた。いつも平均の中に埋もれていた、平凡な自分が悲しかった。

絵里の夢 9

玄関でパンプスを履こうとして、差し入れるつま先が震えているのに気がついた。力が抜け、絵里はその場に座り込んだ。ただ、悲しくて情けなかった。どうして物事は、望まない方向を選び取るように動いていってしまうのだろう。絵里は膝を抱えて蹲った。

こうしていると、自分がどんどん小さく退行していくような気がしてくる。小学生の頃、絵里はよく自室で、こんなふ

うに自分を抱いていた。誰にも受け止めてもらえないという、寂しさがあつたのだろう。

その頃の記憶は、絵里の中では一枚の絵のようになつて残っている。肩で切り揃えたおかつぱ頭の少女が、戸を閉め切つた薄暗い部屋の隅、壁に凭れるようにして膝を抱えて丸くなつている。

（わたしの家はここじゃない、本当の家族は別にいる）

繰り返し心の中で呟きながら、涙をこらえていた。

自分の中にいる子供は、中年になつた今でも、思い出したように現われる。

感傷だ、もうよそつ。

ふと我に返り苦笑して、絵里は今の感情に取り敢えず一区切りつける。

さあ、帰ろう。

立ち上がつて膝に着いた埃を払つ。そしてパンプスを履いて、玄関の戸を開けた。外に出て、戸を後手で閉めた。カチヤリ。金属の凹凸の噛み合つ音がした。その時だった。

何の脈絡もなく、不意に昔の記憶がすとんと落ちてきた。

寛との記憶だ。大学二年の夏休み、アルバイトで行つた軽井沢のホテルで寛と交わした会話。知り合つて、間もない頃だった。

「君はどうして住みこみのバイトを選んだの？」

寛に聞かれて、

「出来るだけ家に帰りたくないから」

絵里はそう応えたのだった。

「若いね、甘い」

寛は絵里を鼻先で笑った。

「そうですね？ わたしには切実なことなんです」

「じゃあ帰らなければいい、俺みたいにずっとここで働けばいい。でも、できないだろう？」

「学校あるし……」

「だよな、学費と生活費全部出してもらって優雅な大学生活送って、夏休みには家に帰りたくないからって住みこみのバイトして、その金は全部自分の小遣いだ。

そんな贅沢な生活、手放せないよなあ」

寛は皮肉っぽく言い放った。

「待てよ」

絵里の夢 10

なんて意地の悪い人だろうと、絵里は思った。しかし相手は、仕事を教えてもらっている職場の先輩だ。「失礼します」

感情を抑えて一礼し、絵里は歩き出した。

「待てよ」

寛が呼び止めた。

「まだ話は終わっていないだろ」

絵里が振り返ると、寛は少し表情を緩めた。

「見かけによらず短気なんだなあ」

「気が強いとも言われますが」

立ち止まって、絵里は応えた。

「ほんとだね」

寛は笑い、そして言った。

「君には、親がいるんだろう？ 家族がいるんだろう？ 帰る所があるんだろう？」

「はい」

「帰る所のあるやつから、帰りたくないなんて言葉を聞くと、腹が立つんだ」

寛は穏やかに言った。

「帰る所、ないんですか？」

「家族がいないんだ」

「親も、兄弟もですか？」

「そうですよ」

応える寛からは、寂しさも気負いも感じられなかった。

淡々と自分の運命を受け入れているように見えた。

そんなふうにして、寛が天涯孤独で帰る家を持たない者だと知った。自分には想像も出来ないような境遇にいた彼が、

その時、絵里にはなぜかとても身近に感じられた。

夫を語るのは難しい。

結婚して二十年になるといつ、ただそれだけの事実にも、

本当に二十年も一緒にいたのかとの思いと、もう百年も顔を

結んで

結んで

結んで

付き合わせているみたい、という思いの間を行ったり来たりする。

同じように、彼が家を出た当初は心が乱れたが、日が経つにつれて、むしろ別れて暮らした方が自然なのかもしれないと思うようになってきている。しかしまたどうした加減か、私達は離れて暮らすべきではない、一緒になるべくしてなったのだ、などと思いつめる日もあるのだ。

また、動かぬ事実というものもある。

寛がいなくなつてから、絵里はよく、二人がまだ仲の良かった昔を思い出すようになっていた。その懐かしさに浸つてゐる時に、絵里は、夫に心を残している自分を感じていた。

絵里の夢 11

寛との思い出を辿ることによつて、絵里は彼が持つ孤独さを改めて知らされた。それはまた、自分たちを結びつけたものでもあった。例えば、そう、絵里はこんなことを思い出す。

寛と出会つた夏のホテルのこと。毎日夕方になると、残飯目当てに現われる野良犬がいた。茶色の雑種だったが、寛はその犬にクロと名づけて、こつそりと可愛がっていた。

「前に肉やつてるところを支配人に見つかつて、えらく怒鳴られちゃつた。たとえ裏口でも、ホテルに野良犬つてのはマズイからね」

寛は従業員出入り口脇の暗闇で、クロに食べ物を与えていた。

「小さい時、同じクロつていう名前の柴犬飼つてたんだ。父親と三人で暮らしてた頃のことさ。クロと一緒に撮つた写真があるよ。撮影者の影が長々と写つてる。その影を指差してお袋に聞いたんだ。

(これ誰?)

(お父さんだよ)

お袋と、親父の話をしたのは、覚えてる限りそれだけだよ。答えた時のお袋の様子から、子供心にも、父親のことは聞いちゃいけないつて分かつたんだ。お袋は話したくないんだつてね。勿論、父親の写真なんて一枚もなかつたから、あれは俺が知つてゐる唯一の父親だ。その影がね。

クラスのボスがいやらしい奴でさ、喧嘩するとすぐに、何だおめえなんて父ちゃんいねえくせしてと、捨て台詞吐くんだ。言い返せないのが悔しくてね。そんな日には写真を取り出して、自分の父親がどんな顔してどういふ奴だつたか、影から想像したんだ。

親父は髪を七三に分けて、どういふわけか白のワイシャツに縞のネクタイ、グレーのVネックのセーター、そして素足に下駄履きなんだよ、いつも。何かのホームドラマで知つたイメージなのかな……。そんなことをよく考えていたからかな、後から自分で作り上げてしまつた記憶なのかもしれない

いけど、実は、その時のぼんやりした記憶があるんだよ。俺は三歳だったらしいけど、しゃがみ込んでクロを後ろから抱いていた。カメラが高い位置にあって、レンズを見上げると眩しかった。それで、瞬きを何度もしてたら、父が言ったんだ。

（はい撮るよー、しっかりと目開けてこっち見てー）

優しい声だよ、ちよつと鼻にかかった低い声だ。顎に当たったクロの硬い毛の感触や、生き物の独特な匂いも覚えてる。だから俺にとっての犬って、辿っていくと親父に行きつくの」

絵里の夢 12

クロは痩せた犬だった。肋骨が浮いていた。野良犬だから食べ物が十分でないせいと思っていたが、そうではなかった。異変に気づいた寛が医者に連れていくと、手遅れのフィラリアだった。クロは急激に弱っていった。それでもふらふらする足取りで、暗くなるとホテルの従業員出入り口あたりに現われた。やがて寛は、クロを自分が寝泊りしている部屋に入れた。

「いくら野良犬でも、最後までいい家は家に入れてやりたいんだ。多分あと一週間は持たないと思うから」

寛はそんなふうに言った。

クロはこれまで、首輪をつけられたことも、ましてや鎖に

繋がれたこともない。いくら最期とはいえ、そんな犬を人の住まいに入れていいものだろうか、絵里は思った。しかしまた、寛はそうせずにはいられないのだからとも思っていた。クロはもう鳴くこともなく、じつと部屋の隅に蹲っていた。部屋の中には、ビニールシートと古い毛布が敷詰められていた。血が混じった赤い小便をしていたから、毛布には、クロがそれでもまだ生きているという証しが、あちらこちらに刻まれていた。

クロが死んだのは部屋に入れて三日目、寛が夜勤明けに戻った朝だった。

「夜中に一度、仕事を脱け出して部屋のドアを開けた時は生きてた。名前を呼ぶとのろのろと頭を挙げて、眩しそうに何度が瞬きをした。頭がぐらぐら揺れていた。残った力を振り絞って、最後の別れをしてくれたんだ」

朝になってから寛が部屋に戻ると、クロの身体は伸びて硬直し、眼は閉じられていたという。

クロの様子を見ようと、絵里が寛の部屋をノックしたのはその日の夕方近くだった。そつと覗くと、動かぬクロを横抱きにし、寛は壁にもたれて眠っていた。

翌朝、まだ薄暗いうちにクロを抱き、二人でホテルの裏手にある小山に登った。ホテルが見下ろせる見晴しのいい場所で、寛は穴を掘り始めた。絵里は新品の毛布に包まれたクロを抱き、寛の肩越しに穴が出来上がるのを見ていた。

寛は穴の底に、清潔な毛布を敷いた。絵里からクロを受取り、別れを惜しむように丁寧に包み直し、穴に敷いた毛布の上にそつと置いた。それからスコップで穴の脇に積み上げた土を、始めは少しずつ、やがて勢いをつけて落としていった。クロはすぐに見えなくなった。

一連の作業を淡々と終えると、寛は絵里を振り返って言った。

「ありがとう」

絵里の夢 13

「私はハムスター飼ったことあるの。ココっていう名前だった」 まだスコップを手にしている寛の背中に、絵里は言った。

「冬の朝、急に痙攣起こしはじめたから、あわてて籠から出して手の中に入れた。死ぬな死ぬなって、ずっと自分の体温で暖めたの。でも、死にかけている、だんだん死んでいくって分かった。そのうちにココは動かなくなった。眼を閉じて、硬くなって、冷たくなっていった。そうなるまでずっと私は自分の手の中にいるココを見ていた。ココが死んでいくのを、誰かが見ているべきだって思ったから」

寛は振り返り、スコップを置いた。

「高校生の頃よ。犬が欲しかったんだけど母に反対されてハムスターにしたの。」

友達か飼っていたハムスターはずごく素早く動いて、手を差し出すと噛みつきたりするのに、ココはドジだった。動きがのろくて、ゲージからどすつと落ちたりするんだよ、びっくりでしょ。ちょっと太りすぎていたからかもしれないけど。

ハムスターって寿命が短い。母は物知りだったから、きっとそれを知っていて、飼うのを許してくれたんだと後で思った。それから生き物は飼わない」

「どうだった？ ハムスターが死んでいくのをみていて、何を感じた？」

手についた泥を払いながら、寛が言った。

「君の可愛がっていたココが、動くものから動かないものへ、暖かいものから冷たいものへ、柔らかいものから硬いものへ、そう変わっていくものをじつと見ていて、どうだった？」

寛は絵里を見つめた。

「これが普通のことなんだ、みんな死ぬんだ、ココもあたしも、命のあるものはみんな死ぬんだ、あたり前なんだ。そう思おうとした」

「そう思えた？」

絵里は黙って首を横に振った。

「じゃあ、その時の思いは何処に行った？ 命に関わる悲しい思い出の、行き着いた場所は？」

「そんな場所どこにもないよ、思いは自分の中をぐるぐるま

わるだけ。悲しい思いの行き先なんてどこにもないし、消えてくれもしないから」

「自分の中に……」「そうだよ、普段は眠っていても、でも今でもこの中にいて、時々思い出したようにぐるぐる巡って、私を苦しめるんだ」

絵里は鳩尾のあたりに手を当てた。

絵里の夢 14

「俺は母親の死を見たんだ。君のココが死んだ時と同じように、高校生の時だったよ」 寛は煙草に火を点けた。

「母は勤め先の工場で転んで、腰を打った。しばらく湿布を貼っていたけど、痛みがいつまでも引かないと病院へ行ったら、癌が全身に転移していた。」

信じられるかい？ そんなことがあるんだよ。

死ぬにはまだ若かったから、母はずいぶん苦しんだんだ。死神から強引に引つ張られてると、母の苦しみを覚えていてそんなふう思ったよ。

（苦しみは全部わたしが持つていく。これから生きていく上で、お前が苦しまなくてもいいように、わたしが全部持つていくからね。わたしの苦しみが大きければ、お前がそれだけ幸せな人生が送れるんだよ）

母は苦しみに堪えながら、俺によくそう言った。

息子がこれから先、苦しんで死んでいった母親の記憶をい

つまでも引き摺らないように、哀れに思って、そんな言い方をしたんだろうか」

寛は煙草を足元に捨てて、踏みつけた。

「その時はね、母は本当に自分の死と引き替えに天涯孤独になった俺に、苦のない人生をプレゼントしてくれたと信じたんだよ。何しろ、高校生だったから」

おかしいだろ、と寛は寂しそうに笑った。

「そんなふうにも思わないことには、納得できないじゃないか。兄弟もいない、父親もいない、この世の中で俺を知っているたった一人の人間である、俺の母親なんだ。その死をそういう形で受け入れたんだ。俺の人生を天国で祝福してくれているってね」

「天国に行つたと？」

「だって、あれを何と理解する？ 君のココと同じだよ。息が止まって、冷たくなって、硬くなって、燃えて骨になる、そして土の中へ。目にしたものはそれだけだ。何か意味をつきたいじゃないか」

「意味なんかはないよ。生まれて、死ぬの。消えてなくなる、それだけのことでしょ」

行き場のない哀しみが、自分のなかでぐるぐる回りと回り出すと、絵里は自分に言い聞かせていた。

（生まれて、死ぬだけだ）

呪文のようにそう唱えていると、やがて少し心が落ち着いて

てくるのだった。

「でも、生まれる、と、死ぬ、の間で人は生きるんだよ、それを無視することが、君は出来るの？ 今生きている現実と、きちんと向き合ってるのかい？ それで生きてるっていえるのか？ ただ、苦しみから逃げているだけじゃないのか？」

寛は絵里を見つめた。

絵里の夢 15

(それで生きてるって言えるのか)

寛にそう言われた時、絵里は心の奥を剥き出しにされ、素手でぎゅと握られたような気がした。

そこには、誰にも知られたくないという思いと、誰かに気づいてほしいという、二つに引き裂かれた思いが宿っていた。

最も敏感で無防備な部分を、寛という人間に触れられた時、男友達という位置にいた彼が、かけがえのない特別な人になった。

この時のことを、絵里はありありと思い起こすことが出来る。

真夏の早朝、頬を当たる高原の、清潔でひんやりとした風、掘り起こされたばかりの少し黴臭いような溼った土の匂い、出来上がったばかりの盛り土、その下で眠るクワ、足元に潰れた煙草の吸殻、寛の紺のスニーカー。そして何より、恋をした二十歳の自分の高揚した心持ち。

全て、長い間忘れていたものだった。

そつだ、そして寛はこう言った。

「どうしてそんなふうに考えるの？ 人の一生を、ただ生まれて死ぬだけだなんて。クワみたいな犬にだって感情があるというのに、生きてきたことを覚えていて欲しいと訴えているように、俺なんかは思えるのに、ましてや人間のことを…。君みたいなお嬢さんが、何が不満で何でなんでそんなに寂しそうな顔で、そんな寂しいことを言う？」「寂しそう？ 私か？」

人からそんなふうに言われたのは、初めてだった。

「ずつと、寂しかったんですよ」

「どうして？」

「そう見えるから」

「どんな時？」

「黙っていても、喋っていても、笑っても、今みたいに泣きそうな時も、いつも…」「泣きそう？ 今？ あたしが？」

「質問ばかりなんだね」

寛は少し微笑んだ。その顔が、とても寂しそうに見えた。彼にも、私がこんなふうに見たのだらうかと、絵里は思った。

「あなたもそう見える」

絵里は言った。

「俺が寂しそう？」

ふいをつかれたように訊き返し、

「可愛がつっていた犬が死んだんだよ、当たり前じゃないか」
寛は応えた。

絵里の夢 16

「寂しい話ならいっぱいあるよ」

寛は続けた。

「例えばお袋だ。苦しみを全部持つて天国に行つたなんて、よくもそんな嘘がつけたなと呪つたのは、思いのほか早かつたよ」

紺のスニーカーが、更に吸殻を踏み潰す。

「二人だけで生きてきたから、もし自分が死んだらと、そういうことをお袋はきちんと考えていたんだろつ。思いがけず多額の生命保険に入つていたんだ。勿論、まだ高校生の一人息子を残して死んでしまつたんで、思つてもいなかつただろつけど。」

お袋には兄が一人いた。俺にはたつた一人の身内だから、お袋が死んでからしばらくは、その伯父の家に厄介になつてたんだけど」

寛はしばらく黙つて、たつた令 被せたまばかりの盛り上がった土、クロの墓を見つめていた。

「俺はまだ未成年だつたから、お袋の生命保険の金の管理は伯父がしていた」

寛はまた、吸殻を踏み潰した。

「それがあれば、俺は美術大学に入って四年間、誰の世話にもならずして過ごせた。全然違つう人生を過ごせた筈だつた」

吸殻は土の中にめり込んだ。

「ある日、伯父が俺の前に土下座した。畳に頭を摩り付けて、許してくれと。伯父は商売をしていたんだ。小さな会社の資金繰りに、俺の金は消えてしまった。

お前には絶対に迷惑かけないから少し待つてくれ、必ず返すからと、涙を流した。で、それからしばらくして、伯父一家はいなくなつた。夜逃げさ」

寛は口元を歪めた。

「また一人だけで取り残されたけど、しばらくは賑やかだつたよ、借金取りのおかげで。昼夜なく訪問者や電話やら」

「寂しい話……」「だろつ？」

寛は笑つた。

「その後、伯父さんたちは？」

「さあね、それつきりさ。それでも二、三年は待つてたかな、あんなに泣いて必ず返すつて言つたんだもの、信じてたさ、子供だつたから」

寛はまた一本、煙草に火をつけた。それをゆつくりと吸い終わると、気を取り直すように両手を払い、スコップを取り上げた。

「つまらない話聞かせちゃつたね、他人の打ち明け話なんて」

退屈だよ。さ、そろそろ行くつか。こんな所まで付き合ってもらえて嬉しかったよ」

絵里の夢 17

ホテルまでの道を下っていく途中、山小屋風の小さな喫茶店に、モーニングコーヒーの看板を見つけた。「時間ありませんか？」

絵里は立ち止まってその店を指差した。寛と、もうしばらく一緒にいたかった。

「そうだな、あと三十分くらいなら」

彼は腕時計を見ながら頷いた。

ログハウス風の店内は新しく清潔で、まだ木の香りがした。常連らしい男が一人、カウンターでコーヒーを飲んでた。奥が小さなギャラリーになっていて、手作りの布バッグや陶芸品が置いてある。

「よろしかったら、記念にいかがですか」

長髪に髭のマスターが、水と一緒に一冊の大学ノートを持ってきた。旅行の途中で立ち寄ったらしい人々の、それぞれが綴られていた。

(「やつほ、軽井沢！」)

(「来年またマスターの珈琲を飲みに来ます」)

かわいいイラスト入りのものもあった。

「絵を描いてもいいですか？」

ノートを捲りながら、寛がマスターに声をかけた。

「それだったら、こちらに描いてみますか？」

マスターはカウンターの下から、スケッチブックとクレヨンを取り出した。

「描かせて」

絵里を見て、寛は言った。

「えっ、私を？」

絵里はびっくりしたが、寛はもう絵里を見つめながら、紙の上に線を引き始めていた。

絵のモデルになったのは始めてだった。どこを見ていいのか分からない。テーブルの上の一輪挿しに視線を落とすと、

「ここを見て」

寛が自分の右肩を軽く叩いた。

彼の視線を感じながら、とても恥ずかしかったことを覚えている。それと同じくらい、見つめられる嬉しさがあった。

寛の視線は優しくかった。ずっとこんなふうに見つめられていたいと思った。

十五分ほど経った頃だろうか、できた、と寛はクレヨンを置いた。そしてボールペンで、絵の隅に書き込みをした。日付と、……絵のタイトル

「ここまで思い出して、絵里ははっとした。そこにはこう記されていたのだった。

『終わりの夢』

それは寛が初めて絵里を描いた、その絵のタイトルだった。

終わりの夢 1

一つの記憶は、また次の記憶へと繋がっていく。ちょっと窮屈だった固い木の椅子、入れたてのコーヒーの香り、マスターが燻らすパイプ煙草のけむり。そして、埋葬を終えたばかりのメランコリーな気分と、始まったばかりの恋の喜びが交じり合って、不安定な思いの中にいた自分を思い出す。あの時の絵を思い出せるだろうか。

確か、ブルーの濃淡で描かれていたような気がする。

頬と顎の線がとても柔らかく女性的で、自分よりずっと美人だと思った。

「とてもいいですね、彼女らしさがよく出ている」

寛の後ろで絵を眺めていたマスターが言った。

「それに、何と云うか、愛がありますね。描く方にも、描かれる方にも」

言われて、絵里は顔が熱くなった。

「恥かしいなあ」

寛も照れくさそうに笑った。

「良かったら、ここに飾らせていただけませんか？」

寛の了解をとってから、マスターはギャラリーの一角にそ

の絵を置いた。ネームプレートにタイトルを書き込んで、絵の下に貼った。

『終わりの夢』。

タイトルの由来を訊くと、なぜか寛は一瞬口籠った。

「昔、友達と出した本のタイトルなんだ。コピーして、自分たちで製本したもの。限定五十部っていう遊びの延長みたいなやつだったけどね。」

彼が文章を書いて、俺が挿絵を描いた。不思議な夢の話。彼が実際にみた、一週間の夢物語なんだ。

彼は灰色の砂に閉じ込められていた。砂の中で目覚め、終日砂の中を泳ぎながら脱出を試みて、失望しながら砂に埋もれて眠るんだ。助けを求めては失敗する、救いのない日々が六日間続く。そして一週間目の明け方、彼は夢を見る。砂漠の地平線、太陽の出る方角から声がした。日の出を待ち、その光りを鏡で四十五度右に反射させよと、声は言った。これがお前にとつての『終わりの夢』となるうと。果たしてそこに行商が通りかかり、予言通りに救われた。『終わりの夢』は救いの象徴だと、彼は言っていた。

砂漠の夢だ。

その時、寛の話聞きながら、絵里も一緒に砂漠の夢をみていたのだった。見渡す限り、乾いた砂色の世界を。そこに一人いることの孤独さに共感していたのだった。それは自分によく馴染んだ世界でもあった。

「その夢を見た人は今は？」

「……死んだよ。応える寛の目がとても暗かったのを思い出す。」

終わりの夢 2

「ぼくは終わりの夢にいる。流子に託した寛の言葉が、ようやく現実のものとなって絵里の前に現われた。」

『終わりの夢』は、かつて友人と作った絵本の題名であり、救いの象徴だと寛は言った。そして絵里を描いた絵のタイトルにも、その名をつけた。絵を置いた喫茶店は、あれから数年後の道路拡張で移転したと聞く。

彼は今、救いを必要としているという自覚を持ち、救いを求めているのだろうか。

そう考えていると、また一つ、思い出が蘇ってきた。

あれは、絵里の実家で泥酔した寛が、同じように度を越した飲み方をする兄と、トラブルを起こした時のことだった。

もう二度と来るなど兄に怒鳴られ、絵里は酔いつぶれた寛を助手席に乗せて車を走らせた。惨めな気持ちだった。まっすぐ家に戻る気持ちになれず、途中、川淵の土手に車を止めた。

古い桜の木が一本、目の前にあった。満開だった。絵里は窓を開け、車の中からしばらくそれを眺めていた。桜にはどうしてだろう、自分を湧き立たせるものがあつた。どんな

時でも、この花を見ると頑張ってみようという気持ちになるのだ。今日、この桜に会えて良かったと、絵里は思った。

「綺麗だね、桜……」 助手席で眠っていた寛が、顔をこちらに向けた。

「起きてたの？」

「今、起きた。」

「一年中、桜が咲いているといいな。」

「どうして？」

「元気になるから、これ見ると。」

「いま、元気？」

「何とかね。」

絵里は寛から目を逸らして、涙が零れ落ちないように、また桜を見上げた。

「絵里を守るよ。」

寛は急に半身を起こし、真面目な顔で言った。

「酔っぱらい……」 桜から目を離さずに、絵里は呟いた。

「ほんとだよ、信じていい。」

信じる……。何を信じるというのだ。「どうやって守るの？」

「俺が持つてる全ての力で。」

茶番だ。不毛な会話。そう思う一方で、しかし、絵里を守るという寛の言葉に嘘はないと、どこかで信じている自分もいたのだった。

終わりの夢 3

佐藤健一の五回目、最終面接日だった。面接は週一回で九十分、五回がワンセット。続く面接を望む人には、また五回単位で申し込んでもらうことになっている。

早い時点で続行を申し出る人もいるが、彼からの意思表示はまだなかった。今回はその確認もしなければならぬ。

更に、メグミを通して偶然知ることになった健一の元カノ、ケイコの出現も気にかかる。

「今の私なら、痛みでなく、その正反対にあるものを与えられそうな気がする。そして何より、彼を好きだというこの気持ち。私は、この気持ちを大事にしたいと思っんです」

と、明日にでも健一に会いたいと言っていたが。

何らかの形で、二人の接触はあったのだろうか。とすればそれは健一にどんな影響を与えているだろう。様々なことが気になるが、面接の前には全てを脇にしておかなければならない。からっぽのまま、健一と向かい合っただ。

前回、彼は亡くなった妹への思いを語った。そしてこう言っただ。

「妹が最後に書いていたのが、砂漠の絵でした。自分の見た夢をヒントにして描いた絵本でした。」

砂嵐に埋まってもまだ眠りつづけている姫のお話でした。何百年か後に掘り出され生きかえる、輪廻というか再生の願

いを込めて描いていたものだったんですね。彼女が死んだ後で分かりました」

その時に聞いた、砂漠の夢、という言葉にひっかかりを覚えたのは、寛に繋がる記憶だったのだ。

砂漠の夢を見ていたという、寛の友人も亡くなったと聞いた。死を間近にした人は、似たような光景を見るものなのだろうか。

健一はこれまでと変わらないように見えた。

「どうですか、最近」

絵里もいつものように切り出した。そして当たり障りのない幾つかのやりとりがあった。十分ほど経った頃だろうか、

「昨日、大学時代に付き合ってた彼女の夢をみました」

ふいに健一が言った。

「どんなふうでした？」

「どんな、と言われても」

「楽しいとか悲しいとか……」「分かりません、目覚めたときに忘れてしまっていた。ただ、夢の中に彼女がいたというこだけは覚えているんです」

終わりの夢 4

「彼女の夢をみたその前の日に、実は本人から電話があったんです。中山さんだったらどうします？ 昔の恋人から突然

連絡があつて逢つてくれと言われたら」 ケイコのことだ。

「そうですよねえ……」 絵里は言葉に詰まる。

「相手によると思いますが」

「ケースバイケースというわけですか」

健一はしばらく考えていた。

「彼女とはあまりいい別れ方してないんですよ」

「そうなの……」「前に、クリスマスの日に大失恋したとい

う話、しましたけど」

「ええ」

「その彼女なんです」

「はい」

「もう二度と逢うことはないと思つていたんだけど、どうし

て連絡してきたのか」

「相手の気持ちが知りたいと」

「そうですね、彼女の気持ちが分からない」

「電話では何と？」

「急なことで混乱しているから、今は返事が出来ないと言ひ

ました」

「彼女は？」

「いつ返事がもらえるのかと」

「はっきりとした人ですね」

「そうです、怖いくらいに」

「怖い、ですか……」「正直、それはありますね。彼女と別

れてからも何年も経つていて、混乱してるなんてただの言
い訳にすぎなくて、本当はただ臆病なだけかも」

「臆病になつてると、ご自分を思われるのね」

「そうです。相手が昔の僕をどう思つているか、そして実際

に逢つた時に今の自分がどう映るか、それが怖いだけじゃな

いかと」

「そう考えると、そうですね、怖いですよ」

「中山さんもそう思いますか？」

「ええ、やっぱり相手の気持ちというのは分からないから、

考え出すときりがありません」

「どこできりをつけたらいいんでしょうね」

「それは難しいことですね」

「中山さん」

ふいに健一の語調が変わつた。

「この、面接という立場を離れて、個人と個人の対等な立場

から、中山さんに聞きたいんです。本当にあなただつたらど

うするのか、聞かせて下さい」

終わりの夢 5

面接の中では、相手から何かを問われても簡単には答えら
れない。彼にとつて大事なことであればあるほど、安易に答
えは出せないものだ。それが日常会話との違いなのだ。今、
健一は、面接という場を離れて、個人として絵里の意見を求

めている。「昔の恋人から急に逢いたいと電話が来た、その相手とはあまりいい別れ方をしていない、だからいまだに気持ちの整理がつかない、相手が今どんな気持ちでいるか、自分がどう見られているか怖い。」

そういうことですよ、私かもしそういう立場だったらどうするか、ということですね」

これまで健一との面接では、立場を離れた個人的な意見を何度が求められている。その度に絵里は緊張し、腹を括って裸の自分をさらけ出す。

「私はとても身勝手な人間です。相手の気持ちよりも自分の気持ちのほうがついても優先してしまつ。それは欠点でもあり長所でもあると、自分では思っています。」

そういうことを前提に言いますと、佐藤さんのおっしゃっている迷いの中には、ご自分の気持ちというものが入っていません。一番大事なのは、自分はどうしたしたいかということだと、私は考えます。」

ですからもしも私が佐藤さんの立場であつたなら、相手の気持ちを推し量るといふ、際限なく続く思いの中に沈み込むのではなく、私は私の思いで動きたいです。逢いたいという気持ちと逢いたくないという気持ちを天秤にかけて、重い方に動きます。」

これが私の、とても個人的な意見です」

健一はしばらく俯いていたが、やがて顔を挙げ、溜息をつ

いて静かに笑つた。

「とてもシンプルなことなんですな」

「ええ、理屈では、でも、人の気持ちというのとはそんなに割り切つていけるものではない。だから苦しむわけです」

「中山さんも、苦しみますか？」

「はい」

「中山さんのような人でも、例えば、逢いたいののに逢えない人がいるんですか？」

「……はい」 絵里はふいに涙が出そうになった。

逢いたいののに逢えない人。

私は、本当は寛に逢いたいのだ。

それが今、はっきりと分かつた。

「どうして人は苦しむんでしょうか」

健一が呟く。

「そこにきつと大事なものがあからだと思ひます」

絵里は自分に言い聞かせていた。

終わりの夢 6

「僕は妹への思いに苦しんだ、妹は僕にとってかけがえのない存在だったから」 健一は言つ。

「同じように、彼女との別れで僕は傷つき、彼女を傷つけたことにも苦しんだ」

「ええ」

「行き場のない思いから逃れられない自分がいた、そんな自分がたまたまなく情けなかつた。でもそれは、苦しむのは、そこに大事なものがあるからだ」と、中山さんは言いましたね」

「はい」

「これまで中山さんと話していつた中で、それが一番嬉しい言葉です」

「そう言っていただけだと私も嬉しいです」

「僕が苦しいのは、僕には守りたい大事なものがあるからだと思います」

「そうですね」

「そう考えれば、僕はまだ苦しめると思います、大事なもののために」

絵里は健一との面接に限界を感じていた。

彼の言葉によって、掻き立てられてしまうものがある。どうしても、寛を思い出してしまつたのだ。自分の問題を脇に寄せて、健一と向かい合うことが出来なくなっていた。

「面接は今日まででしたね」

絵里の訊きたいことを、健一から切り出した。

「はい。ご希望があれば、更に五回の申し込みをしていただくようになりますが」

そう答えると健一は少し考えてから、

「しばらく休ませていただくわけにはいきませんか、ちょっと一人で考えてみようかと」

「ええ結構ですよ、分かりました」

絵里はほっとした。

「中山さんとこんなふうにご話ができて幸運でした」

「私もです」

「これまでは真つ暗で何も見えなくて、どこに行つていいのかも分からなかつた。でも、中山さんが隣りにいてくれたから」

「いえ、私はただ見ていただけです」

「見ていてもらえたから、暗闇も歩けました」

健一は恥かしそうに笑つた。

「こちらが希望すれば、その時にはまた中山さんと再開してもらつことも出来ますか？」

「はい、たぶん」

健一は、初めて玄関まで見送りに出てくれた。安堵と寂しさの混じつた思いで、絵里は頭を下げた。

終わりの夢 7

健一の家を出て、いつものように彼の父がいるコンビニの前をいったんは通り過ぎた。少し歩いてから思いついて、来た道を戻り店の中に入って見た。「いらっしやいませ」

カウンターの中にはアルバイトの高校生らしい男の子が一人、健一の父は奥の冷蔵庫を開けて飲み物の入れ替えをしていた。

絵里の存在は知っていても、顔は知らないはずだった。隣の冷蔵庫の扉を開けて、ミネラルウォーターを取り出すと、ありがとごさいました、と柔らかな感じのいい声で絵里に頭を下げた。

この紳士のどこに、家族を巻き添えにした狂気が潜んでいたのだらうと、改めて絵里は思った。

店を出て少し行つた道の端に、健一の祖父、芳造が立つていた。

「あ、佐藤さん、どうもお世話になりました」
絵里から声をかけた。

「先生、さつき孫から聞いたんですが、今日で終わりつてほんですか」

「はい、一応、区切りをつけさせていただきました」

「それは、先生の方から孫に見切りをつけたつてことですか」

「そんなことはないです、健一さんの話の中で、しばらくお休みしようといつて」

「じゃあ、また来てもらうつてことも出来るわけですか」
「ええ、健一さんがそう望まれれば」

絵里は、この老人の気持ちをとてても有難いと思つた。

「それはよかつた……。この前は俺が家の中のこたごたやら何やら、色々と余分なこと言つて、そいで先生の気持ちに水差すようなことになつたんかと、気になつたもんで」「そん

なことないです、お話していただいて嬉しかったです」

「そつかい……」 芳造は安心したように、少し笑つた。

「先生に来てもらえるようになって、孫も少し元気になつたみてえで、だからもつと来てもらいたかつただけど」

「また必要ならばお呼びください」

「残念だなあ」

芳造は鼻を吸つた。今日は冷え込みが厳しい。

「寒いので風邪などひかれませぬように」

「あんたも元気でな、短い間だつたけど、ありがと」

芳造は深々と頭を下げ、絵里が通りを曲がるまでの間、ずつと見送つてくれた。

終わりの夢 8

寛が家を出て、一ヶ月が経とうとしていた。最近になつて、絵里は健一との最後の面接で交わした会話を、しばしば思い返していた。

「もしも私が佐藤さんの立場であつたなら、相手の気持ちを推し量るといつ際限なく続く思いの中に沈み込むのではなく、私は私の思いで動きたいです。逢いたいという気持ちと逢いたくないという気持ちを天秤にかけて、重い方に動きまします」(中山さんのような人でも、逢いたいのには逢えない人がいるんですか?) (どうして人は苦しむんでしょうか) (そこにきつと大事なものがあるからだと思ひます)

しかし、思いはただ日常に流されていく。朝起きて、定時に家を出る。会社で八時間働き、また定時に帰宅する。簡単な食事を摂り、風呂に入って洗濯をする。本を読み、たまにレンタルビデオの映画を見る。健一の後にはすぐ、別の面接も入っていた。それが毎週水曜日。一日は始まり、終わっていた。

そんなある日、出勤前のあわただしい朝に、流子から電話が入った。

「すみません、お忙しい時間に。……その後、寛さんから何か連絡入りましたか?」「いいえ、何も」

「そうですね……。実はあの、会っていたいただきたい人がいるんです。先日お話した片山くんですけど、覚えてらっしゃいますか?」「ああ、あの〆待合所〆の彼ね」流子の幼なじみという片山くんは、いわゆる臨死体験の持ち主だという。その祖母がやはり同じ体験者で、自分が足を踏み込んだ世界を〆待合所〆と呼んでいると聞いていた。その片山くんが、どうしてか興味を持って、是非絵里に直接会ってみたいと言ってくれているらしい。急で悪いが、出来れば今夜はどうかという。特に予定がなかったので、一ヶ月前と同じホテルのカフェバーでと約束をして、電話を切った。

寛が家を出て一ヶ月、と改めて思う。

あつという間だったという思いと、ずいぶん長い時間を過ごしたという、二つの思いがある。そう考えて、またかと思

わず笑ってしまつ。寛のことになると、いつもそうだ。両極端の思いの中で、自分の気持ちが揺れ動く。

終わりの夢 9

片山くんは、がっちりとしたスポーツマンタイプの男性だった。髪はすっきりと短く、腰の入った丁寧なお辞儀をする。

「すみません、急にお呼びたして」

頭を下げる流子の隣りで、行儀良く膝の上に両手を置いかしこまっている。

「お酒は何を飲まれますか?」

緊張気味に片山くんが口を開いた。

「ごめんなさい、車で来たから」

絵里が応えると、

「流子ちゃんも飲まないし、じゃあ僕だけですか」

すいませぬえと、片山くんはビールを注文して、上着を

脱いだ。

「暑がりなんです、片山くんは。暖房に弱いみたいで」

流子が言つ。

「すいませぬ、むさくるしくて」

彼は額の汗を手の甲で拭つ。

「何となく、想像した人と違つわ」

絵里が言つ。

「はあ、それはまたどんな想像で」

片山くんは、ビールを一口飲んで口を拭う。

「もつとエキセントリックな感じの人かと」

「はあ、それはまたこの人がどんなふうに言ったのか知りませんが」

と、隣の流子を指して笑う。目尻が下がって愛嬌顔になる。そろそろ緊張も解れてきたようだ。

「僕はこういう者ですが、まあ一つよろしく」

片山くんはこやかに手を差し出す。戸惑いながら、絵里はその手を握り返した。大きくて柔らかくて、少し湿っていた。片山くんは、絵里の手を包み込むようにしっかりと握り直した。

「はあ、なるほどねえ……」 長い握手だった。

「はい、すみませんでした」

ようやく手が離れた。

「ごめんなさいね、急に驚いたでしょう」

傍らで流子が済まなそうに言った。

「すいません、まあ、こういう奴でして」

そうだったのか。

ようやく絵里にも分かった。

流子は彼を、不思議な感じの人、と言っていた。逢ってみれば分かる。

「私の手から、何か感じ取れましたか？」

絵里は片山くんに訊いた。

「いや、それはどうでしょう、あまり期待しないで下さい」

終わりの夢 10

「えっと、すみません、ビールもう一本注文していいですかね、悪いですねえ、一人だけ飲んじゃって、集中するとちょっと喉が乾くもんで」

彼は手を挙げてウエイターを呼び、ビールを追加注文してから、グラスの水を飲み干した。

「ねえ片山くん、そんなに喉が乾くなんて、あなた糖尿病じゃないの？」

流子が心配そうに言った。

「大丈夫だよ、週に二回もジム通いしてるんだから、ということばつまり、健康管理は万全でして。あ、気が付かなくてすみません、コーヒーのお代わりは」

「いえ、もう……」 新しいグラスと共に、ビールが来た。

絵里が手を伸ばそうとすると、

「あ、恐縮です。すみません、こんなやつはほつといてください、注ぎ方にもこだわって自分でしないと気が済まないひねくれ者でして」

片山くんはよく冷えたグラスに、注意深くビールを注ぎ入れて、またうまそうに一気に飲み干した。

「ふうー、……ちょっと落ちついたかな……、こつ見えても小心者でして、人様とお話する時はそれなりの準備が必要で。

……はい、さてお待たせしました」彼はハンケチを取り出

して額と手を拭い、膝の上に両手を置いた。

「どこから話したらいいか、そうですね……、まず流子ちゃんから中山さんのお話を聞きました。ご主人とのことです」言いながら、隣りの流子と顔を見合わせる。

「その時に何となく引つかかって、お話したいと思っただんです。いや、どうしてかは分かりませんが、心が引つ張られるんですよね。普通は気持ちがちらに向かうとか、気にかかるとかという表現をするのかもしれませんが、僕の場合、引つ張られると言うと、とてもしつくりくるんです。これまでの体験上、そういう時はその感覚に従った方がいいのです」

「で、どうでした？ 私の手から何か？」

気が急いで、語尾が裏返った。

「とても強い思いがあります。それはいいものです。大切にされた方がいいでしょう。何かに迷った時には、それに従えばいいのではないのでしょうか」

「もっと具体的に言っていたいただけますか」

絵里の言葉に片山くんは苦笑した。

「いえ、僕は古い師でもいわゆる超能力者でもないの、具体的なことばかりませんよ。ただ、強い思いがあなたを支えていつてくれると感じます」

「思い、ですか……」

終わりの夢 11

絵里は何だか気が抜けてしまった。片山くんの話は、あまりにも漠然としすぎていて、「変な期待させてしまったようではないですか、かえって悪いこと言っちゃったかな」

片山くんはすまなそうに言った。

「私は、自分の持つている気持ちを肯定して、思ったように動いていいと？」

「はい、そういうことです」

彼は大きく頷いた。

その気持ちが、しばしば両極端の間で揺れ動くから困るのだ。

「あの、わたしもお話があるんですが」

それまで黙っていた流子が、片山くんと顔を見合わせてから、遠慮がちに口を開いた。

「前に寛さんから聞いた話で、ちょっと思い出したことがあるんですが」

「思い出したこと？」

「ええ、あの、沖繩の友達のこととはご存知でしょうか」

「沖繩？」

結婚前の一時期、そこにいたことは知っている。絵里も一度遊びに行ったことがある。

「寛さんは、その友達をとても大事に思っていて、今はまだ行かないけど、時が来たら必ず行くと、そんなふうに言っ

ていたことがありますか？」

「そんな大事な友達が沖縄にいたのかしら」

「あの、もう亡くなられていたということでしたから」

そういう話は聞いた覚えがない。

「でも、例えば彼が沖縄にいたとしても、どうしたらいいのかしら」

沖縄は広い。またしても漠然とした話だ。

「絵里さん」

片山くんが言った。

「あなたは、ここにいていいと思いますよ」

「帰ってくるまで待つのですか？ 寛は本当に帰ってくるのかしら」

「さあ、それは……」 片山くんが首を傾げ、気の毒そうに目を伏せた。

人の未来なんて、誰にも分かるわけがないのだ。だから迷ったり苦しんだりする。大事なことが、そこにあるからだ。

健一ともそう話したのではなかったが、きっとそういうことなのかもしれない。

「あまりお役に立てなくて」

帰り際、片山くんはそう言っただけでまた絵里の手を握った。最初よりも更に長い握手だった。暖かい手を通して、彼の励ましをもらえたよな気がした。

逢えてよかった。

終わりの夢 12

片山くん達と別れた後、真つ暗な部屋に帰っていくと、待っていたように書留が届いていた。裏を見てどきんとした。寛の名前が書かれてある。住所はない。立つたまま、慌てて封を切った。手紙だった。「書出しの言葉に迷っているうちに、もう一ヶ月が経ってしまった」

レポート用紙に細かな文字でぎっしりと、かなりの枚数があった。最初だけを読んで、絵里はいったん手紙を閉じた。手が震えてきたからだだった。

靴を脱ぎ、部屋に入る。洗面所で手を洗い、顔を洗った。冷たい水で何度も顔を叩く。ようやく震えが止まった。

私はどうして、こんなに動揺しているのだろう。目の前の鏡に映っている自分に、そう問いかける。

鏡の女は答えない。自分が他人のように見える。

たった今、逢ってきたばかりの片山くんとのやりとりを反芻する。彼はやはり不思議な人だった。心の準備をさせてくれたのかもしれない。

絵里は腹を決める。

私は自分の気持ちに従えばいいのだ。

キッチンテーブルに座り、絵里は寛からの手紙を開いた。

「書出しの言葉に迷っているうちに、もう一ヶ月が経ってしまった。心配かけてごめん、と書いて、もし君が心配し

ていなかったら格好悪いし、連絡しなくてごめん、と書いても、別に連絡なんて期待してなかったと思われているかもしれない。あるいは、いなくなってくれて清々した、このまま帰ってこないで欲しいと思われているかもしれない。離婚届に押し印して送れば、喜ばれるのかもしれない。でも、もしかしたら君は、これは願望に近いのだろうが、僕を心配してくれているかもしれない。

とにかく君が今、どんな気持ちでいるのか予測ができなくて、これまで手紙が書けなかった。ずっと、君の気持ちがあつた方向にあるのかを推し量っていた。まるで恋をしている少年みたいだ。笑ってしまう。

そういうことが、とても馬鹿げていると、おととい急に気がついた。僕は今更、いったい何を恐れていたんだろう。君の気持ちがあつたであれ、僕は語らなければならぬ。それが君と一緒にいた二十年の、僕なりの責任取り方でもあると、ようやく気づいた。

君の気持ちがあつたにあつても、どうかこの手紙を最後まで読んで欲しい。

前置きが長くなってしまったね。

終わりの夢 13

君は河村流子に逢ってくれただろうか。そして、彼女に僕からの伝言を聞いてくれただろうか。(ぼくは終わりの夢

にいる)

という伝言は、芝居がかつている、いい気なものだと、あるいは君に笑われてしまったかな。

『終わりの夢』を覚えているかい？ 僕たちが出会った軽井沢で、君をスケッチした画用紙に、『終わりの夢』と書いたのだけれど、でも、そんな昔のこと君はもう忘れていないかもしれないね。

どうしてそのタイトルをと訊く君に、僕は、むかし友人と書いた本の題名だと話した。そうだ、友人が文章を書いて、俺が挿絵を描いた。彼がみた一週間の夢物語だ。灰色の砂に六日間閉じ込められた彼が、一週間目に救われるという話助けが来て、彼の悪夢を終わりにしてくれたのだ。『終わりの夢』とは救いの象徴で、彼はそこに自分の思いを込めていた。

僕がこれから書くのは、その親友の話だ。

彼の名は今村。結婚前、僕が沖繩のホテルで働いていた時、君は一度遊びに来てくれたね。実はあれより三年前、僕は沖繩の、別のホテルで働いていた。彼とはそこで知り合った。

僕らには、いくつもの共通点があった。年齢も同じなら、高校を出てから職場を転々としていること、一人っ子であること、そして父親がいなくて同じだった。

世の中には似たような境遇の人間がいるものだと、救われた気持ちになったことをよく覚えている。それまでの僕は、

自分がとても不幸な人間で、この不幸は誰にも理解されないものと諦めていたからね。

しかし、彼と僕には決定的な違いが二つあった。今村は背が高く美男子で、女性に好かれるタイプだった。そしてもう一つ、僕の母親は死んでいたが、彼の母親はまだ生きていた。

まだ生きていた、と僕は書いた。そう、確かに今村の母親は生きてはいたが、もはや人としての存在ではなかった。少なくとも僕にはそう見えた。

彼の母親は、神経系統の難病に侵されていた。持っている記憶の始めから、自分の母親は人とは違っていたと彼は言った。人と違った動き方をして、人と違った顔つきで、とても感情の起伏の激しい人だった。

僕は一度、彼に連れられて母親が入院している病院へ行ったことがある。精神科病棟だった。彼女は寝たきりだった。ただ、眠っているだけだった。植物人間。僕にはそう見えた。でも彼は、その老婆の手を握って耳元で挨拶し、振り返って僕に言った。

（ほら笑ってる、僕が来たのが分かるんだよ）

終わりの夢 14

手足顔面などが自分の意図とは無関係に動いてしまつ不随意運動から始まって、しだいに認識力が失われ、人格崩壊を

経て死に至る。それが、今村の母親の病気だった。僕が見た彼女は、全てを辿つた末路だった。彼女にはただ、死だけが残されていた。（あれが終わりの姿だ、お袋は、あれで終わる）

病院からの帰り道、今村は言った。

（分かるよ）

僕は応えた。

僕だつて、母の死を通つてきていた。癌の痛みに苦しみ抜いて死んでいく母を看取つてきた僕には、もう意識もなく僕にはそう見えた。ただベッドに横たわつて静かに死を待っている彼の母親の方が、恵まれているとさえ感じていたのだ。しかし今村は、小さく笑つた。

（でも、俺はこれから始まるんだよ）

そして、押し出すように言った。

（遺伝性の病気なんだ。母の父がそうだった、母の四人いる兄弟のうち、兄が同じ病気だ。俺もいずれあなるかもしれない）

絵里、これはもう二十五年も前の話だ。

今では医学が進歩して、その病気は遺伝子検査が出来るようになってきている。片親が罹患したら、五十パーセントの確率で遺伝する。発症率は百パーセント。だから、遺伝子検査で陽性と出た場合は、死の宣告をされるに等しい。検査はメンタル面を含めて、とても慎重に行われるらしい。発症年齢は、

平均すると三十歳から四十歳の間だという。確立された治療方法は今でもない。病いは進行して、死に至る。そういう病気がた。

今村は、自分の未来に対して悲観的だった。

悲観的。そういう言葉しか知らないから使っているが、その言葉の持つ重みなど、僕には分からない。いらいらと落ち着きをなくしたり、会話の中で咄嗟に言葉が出なかつたりなど、誰もが経験している日常的な出来事にさえ、発症かと怯える彼の心の内など……。だから、彼はとても物静かでクールに見えた。自分を律していたからだ。自分の内側から変化が始まった時、すぐ分かるようにと。

彼は僕にこう言っていた。

(もし俺が少しでも変だと思えたら言ってくれ)

(言ってしまう?)

(死ぬよ、決まってるじゃないか。脳が破壊されて判断力を失う前にな。だから、必ず教えてくれよ)

(君を殺す手助けかい? 殺人者としての俺の未来はどんな?)

(大丈夫だ、俺が天国でお前を守ってやるさ)

終わりの夢 15

その頃だ、彼と『終わりの夢』を書いたのは、彼が見た砂漠の夢は、彼自身の未来だ。一般的に言われている発症年

齢までにはまだ間がある、医学が発達して有効な治療手段がでてくるかもしれない。そんな希望があったから、救いの物語も書けたのだろう。

彼は、自分が発症すると思い込むことで、将来に対して身構えていた。いざという時に、まさか、ではなく、やっぱりな、という冷静な自分でいられるように。冷静に死にたいと、彼はよく言っていた。勿論、それは本意ではなかった。彼は病気にもなりたくなかつたし、死にたくもなかった。

今村という人間が何を抱えていたのか、君に分かつてもらえただろうか。この先が本題になる。

医学の進歩という希望を抱いてはいても、実際、今村には未来がないに等しかった。母親の病状、四肢の不随意運動や麻痺、嚥下障害、人格崩壊をまじかで見ってきた彼にとつて、発症率の五十パーセントという数字は、九十九パーセントだったのかもしれない。そんな彼に、人並みの恋愛、ましてや結婚などはありえなかつた。しかし、さつきも書いたように、今村は人目を引く容貌の持ち主だった。その上、内面の葛藤が時折滲み出てくる、物静かでクールな男だ。いくら彼が恋愛はしないと決めてはいても、相手が放っておかなかつた。

決定的な出来事はその夏にやってきた。

夏休み、いつものようにホテルは、地元のアルバイト学生を何人が雇つた。その中の一人、和美という名の女子大生に、

今村は惹かれたようだった。色白で髪の長い女の子だった。

僕と今村はホテルの従業員部屋で寝泊りしていた。部屋は隣同士だったから、たいていの夜は、仕事が終わってから寝るまでの時間、酒を飲みながら一緒に過ごしたものだ。そんな時の中で、今村は和美を、こんなふうに言った。

(彼女は、真面目でおとなしそうに見えるけど、実は勝気で芯の強そうなところがあるね。よく笑う人だけど、笑った後の表情の整え方が、人とは何だか違って見えるよ。今の笑顔が嘘みたくにすつと真顔に戻っていく所が、見ているものを寂くさせるところがある。守ってやりたいというか、そういう気持ちにさせるところがあるね)

しかしこれは、単なる噂話の延長だった。彼には、自分の気持ちをコントロールできる能力があったし、互いに納得済みでつきあっている人妻がいて、性欲も適当に処理できていた。

終わりの夢 16

ある日、僕は和美に呼び止められた。(お話したいことがあるんですが、少しお時間いただけますか?)

思いつめた顔をしていた。

和美は今村のことで相談にのって欲しいと言った。自分の気持ちを伝える手紙を書いたが、返事がない。かといって、こちらを避けているふうもないと。

(今村さんの気持ちが分からないんです。私だって、ただ気持ちの動くままに、手紙を書いたわけではないんです。これまで接してきた中で、今村さんも私のことを、その、……嫌いではないと確信したからなのですが。それとも今村さんという人は、女性には誰にでも思わせぶりの態度を取るんでしょうか)(思わせぶりの態度?)

(はい、そうです)

和美は大きく頷いた。

(例えば?)

(こういうことは言っていないか、どうなのか……) (彼女は独り言のように呟きながら、しばらく迷っていた)

(あの、一度キスしたんです、この前、時間外の仕事を頼まれて、帰宅時間が遅くなった時、今村さんに家の近くまで送ってきてもらったんです、車で。その時に、好きだ、ともいわれました)

ああ、と僕は思い出した。

彼の部屋は隣りだから、ドアの開け閉めで互いの出入りが分かる。

その夜今村は、なかなか部屋に戻ってこなかったの、一人で飲んでるうちに僕は眠ってしまった。翌朝、昨夜はどうしたと訊ねると、ちょっとな、と彼は言葉を濁していたのだった。

(あの、誤解のないようにしていただきたいんですが)

和美が言った。

(別に、キスをしたから責任を取れと、そういうことではないんです、私)

彼女は真剣だった。その真剣な表情と何だか滑稽に聞こえる言葉が可笑しくて、思わず笑ってしまった。

(分かってるよ、そんなこと)

(真面目な話してらんです、私)

彼女は声を荒げた。

(僕も真面目だよ、ごめん、笑ったりして)

彼女は急に泣き出した。

僕は慌てた。

そこはホテルの従業員通路がある裏庭で、めったに人が通らない時間帯ではあったけれど、誰も通らないという保証はどこにもなかった。

終わりの夢 17

彼女はしばらく泣いていた。泣いているバイトの女子大生と二人だけという状況は、いかにもまぶしかった。僕はその間、落ち着きなく煙草を吸いながら、さりげなく左右に気を配って誰もこないことを祈っていた。(すみません、この頃よく眠れなかったものだから)

涙を拭いて、彼女がようやく顔を挙げてくれた時はほっとした。

(中山さんは彼と親しいので、何か知っていることがあるかと思っただんですが)

(僕は何も聞いてないよ)

女とキスしたことを、友達に報告する奴なんていないだろう、中学生じゃあるまいし。

僕は心の中でそう呟いた。

(今村さんは、誰か他に付き合っている人がいるんでしょうか)

(彼女がいるかってこと？ それはないよ)

(それは確かですか?)

(ああ、それは、確実にいないよ)

身体だけの関係と割り切って付き合っている人妻は、この際、除外する。

(あの、どう思いますか？ 女性の方から積極的になるということに対して)

(いいんじゃないの、人それぞれの個性で)

(彼はどうかしら)

(さあ、それはどうか……)(私から、直接はつきりと彼の気持ち聞いてもいいでしょうか……いいですよ)

彼女は必死だった。かわいそうに、と頭の隅でちらつと思っただけ、それが言葉になって出た。

(それで君の気持ちが済むんなら、そうすれば)

しかしこれは失言だった。まるで僕が、何かを知っている

と言わんばかりではないか。

(どういふことでしょうか)

果たして、彼女の表情が変わった。

(どういふことと言われても……)(今村さんは、私のことなど気にかけていない、多分だめだろうけど、そういふことでしょうか)

(だからさっきも言ったように、僕は何も聞いてないよ、彼とは親しいけど、女性の話はしたことがない)

(女性は好きじゃないといふことですか……) 和美の想像があらぬ方向に行きそうだったので、僕はあわてて手を振った。

(違う違う、そんなことじゃなくて、……困ったなあ。僕では何も分からないよ、やっぱり本人に聞いてみるのが一番だと思ふよ)

(……わかりました、そうします)

終わりの夢 18

次の日の夜だった。今度は今村から彼女の話を聞かされた。

(和美が君のところに行ったらいいな)

彼は憂鬱そうだった。

(彼女から話あった?)

(ああ、さっきな)

(何て答えたんだ?)

今村は黙ったまま、ウイスキーをストレートのまま飲み始めた。

(お前だったら、どう答えられる?)

やがて今村は口を開いた。

(そんなこと知るか)

僕が言うと、彼は大きく一つ溜息をついた。

(好きなのか)

僕は訊いた。「冗談のつもりだった。彼の憂鬱の原因は、女に対しての煩わしさだと思っていたから。」

(ああ)

しかし、彼は頷いた。

僕は驚いて、思わず今村の顔を見返した。

(本気が)

今村は無言で頷いた。

(これまで女を好きになったことは?)

(ない)

彼はまた、短く答えた。

僕は衝撃を受けた。改めて、彼の孤独さの一端を垣間見た気がした。しかし、それだけではなかった。むしろ僕は、自分自身に動揺していたのだった。奇妙な言い方だけれど、僕と和美の間に割り込まれた気がして、心がひどく騒いだ。そんな自分に気がついて、僕は本心と向き合わざるを得なくなった。

和美に惹かれていたんだ、この僕も。

僕たちは朝から晩まで、ホテルという閉鎖された空間にいた。休日になると、僕は少し遠出して絵を描いていたが、今村は終日部屋にこもって本を読んでいるか、文章を書いていた。その頃の僕たちは、仕事を離れた場所で人と接する機会が少なく、特に同年輩の異性に対する免疫が、あまりなかった。

(どうするんだ、これから)

内心の動揺を隠して、僕は訊いた。

(どうしようもないじゃないか)

壁にもたれて黙々と酒を煽っていた今村は、やがて滑り落ちるように崩れていった。

今になってみると、和美の顔が思い出せない。彼女の持つ、性的な雰囲気は惹かれていただけかもしれない。細部は覚えていないけれど、彼女は確かに男好きのするタイプだった。

終わりの夢 19

和美はそれから、しばしば僕に相談を持ちかけてくるようになった。(今村さんは私を避けているんでしょうか、今朝から視線を合わせてくれないんです、それとも私が何か気に障るようなことでもしたのかしら)

彼女がそんなふうに通ってくる日は、僕の心はいくらか穏やかだった。

(ホールの掃除をしていた私を、手伝ってくれたんです。あの時間、彼は休憩だったはずなのに。そういうこと、誰にでもするんですか、とても優しい目で私を見るんです、思い過ぎでしょうか)

そう言われた後は、心がとても乱れた。

そんな日々の積み重ねがあって、二十歳そこそこの男女は、ふとしたはずみで結びついてしまった。今村みたいな男は疲れる、あなたが好きと和美は言った。

和美との関係は深まっていった。いつまでも今村に隠し通せるわけがなかった。僕は彼に、二人の関係を告白しようと決意した。もともと今村に惹かれていた彼女を、僕が横から奪い取ったというような負い目があった。それを背負い続けて、彼女と付き合っていくたくなかった。

いや、もっと正直になろう。その時僕は、今村に優越感を抱いていたんだ。俺が持ててあいつが持てないもの、未来というものを俺は持っているんだと、そんな変な高揚感が確かにあった。

僕は今村が好きだった。あまり条件のよくない職場だったが、彼と一緒にだからまあいいかと思った。仕事が終わって、彼と酒を飲んでいる時間が好きだった。彼がいるなら、このまま沖繩に留まってもいいかと思ったりもしていた。

けれどもそうではない自分もいたことを、この時に知った。僕は今村に嫉妬していたのだろうか。仕事は素早くきっちり

とこなして上司から信頼され、ホテルにくる女性客の多くを振り返らせ、その上何より、彼はかつて和美の心を独占していたのだ。

今でもあの時の心の内を、僕は書けないでいる。多くの思いが重なって、日々乱れて交錯し、あるものは消え、あるものは残った。ただ、こう思っていたことはよく覚えていて。俺が彼でなくてよかった。俺に未来があつて良かった、と。

絵里、人は多かれ少なかれ、心の内に悪を持っているけれど、僕という人間はその傾向が強いのだろう。僕の中の悪魔は、こんなふうにはひよいと顔を出してきた。そしてあの時に出ていった悪魔が、時を経て戻ってきたんだ、僕を刺しにね。

終わりの夢 20

僕は今村に和美との関係を告げた。

(そうか……)

今村は呟いた。

(悪かったな)

僕は言った。それは本心だった。恋愛にルールはないとはいえ、やはり横から彼女を奪い取ったという負い目があった。しかしそれと同じくらい、奪い取ったという自負心もあった。(どういう意味だ)

今村の顔色が変わったのは、そんな僕の気持ちに彼に読み取れたからだと思う。

(何が悪かったのか言ってみろ)

今村の語気が荒くなった。

(お前の気持ちがあつていたし……)(俺のどんな気持ちがあつていたんだ)

(和美に対する気持ちさ)

(俺が彼女を好きだったとでも？ 彼女がそんなふうと言ったのか？)

(お前が言つたじゃないか)

(俺が？ 俺がいつそんなことを言つた)

(お前、ほんとに覚えてないのか)

僕の言葉に、今村は急にうるたえて落ち着きをなくした。

(俺がいつ、そんなことを言つた)

今村は、僕がそれまで見たこともない心細げな、子供みだいな表情を浮かべた。

(お前は酒を飲んでいったんだ、ウイスキーをストレートで)

これまでそんな飲み方なんてしたことなかった。その時に言つたんだよ、酔つてて忘れたんだろ)

事実、あの時の今村はひどく酔つていた。

(俺はこれまでいくら酔つても、自分の言つた言葉を忘れたことはない)

(これまでにないくらい飲んだということだろ)

彼は発病を恐れていた。ごく普通の物忘れ、感情の乱れに敏感だったし、指先がちよつと震えても気にしていたようだ

った。

(……: そうだな、そうかもしれない)(お前、何をそんなに心配してるんだ、病気の発症はふつう中年以降だろう、お前はやつと二十歳すぎたところだ、神経質すぎるぞ)

僕は軽く言い放った。

(俺の気持ちがお前にわかるか)

今村は吐き捨てるように言った。

(悪かったな)

他のどんな言葉も思いつかぬまま、また僕は言った。それがどれほど彼を傷つけるか、気づかぬままに。

終わりの夢 21

(おまえ、悪いってどついうことだ、同情かよ) ふいに今村が立ち上がった。顔を高潮させ、握った拳を震わせていた。

何度も言うように、彼はとても穏やかで静かな男だった。声を荒げたのさえ、さつき初めて聞いたほどだった。感情の乱れは、発病の前兆を連想させて怖いと言っていたのだ。

(今村、落ち着け)

僕は彼の肩を押えた。今にもその拳がこちらに飛んできそうな勢いだ。彼は僕の手を振り払った。僕たちはもみ合って、取っ組み合った格好のまま、バランスを崩して窓ガラスに突っ込んだ。派手な音を立てて、ガラスが割れた。僕た

ちをつまく避けながら、破片が部屋の中に飛び散った。今村の動きが止まった。呆然と立ちつくし、肩で息をしていた。

(おい、いったい何やってんだよ)

急に怒りが込上げてきて、僕は怒鳴った。

(俺がお前に何したよ)

鼻の付根がひどく痛んだ。もみあった時に、彼の肘強く当たった所だ。そっと触れると、するつと鼻血が下りてきた。手のひらが真つ赤に染まった。それを見て、僕は完全に切れた。

(お前ちょっとおかしいぞ、自分でそう思わないか、

お前、絶対おかしいよ)

僕は叫んだ。

(悪かった、大丈夫か)

近づく今村の胸を両手で強く押し返して、

(冗談じゃねえよ)

僕は彼の部屋を出た。そして最後に振り返り、彼を見据えてこう言った。

(お前、病気だよ。絶対、病気だ)

そのまま僕は戸を閉めた。一瞬、今村の顔が歪んだのを見て少し胸が痛みはしたが、後悔はしなかった。

絵里

生きていると取り返しのつかないことがあるよね。一生それを知らないで通せる人は幸福だ。そう考えると、僕はもう、

あの二十歳の夏の日に不幸を呼びこんでいたんだ。二十歳からの僕は、もはや若者ではなかったような気がする。

お前、病気だよ。

そう言われることは、今村にとっては死の宣告に値する。十分分かっていたことだ。あの一言を口に出す前、口にしながら、言い終わってから、それら全てがスローモーションのように、とてもゆっくり過ぎて行ったように、今になると感じる。僕は一人の人間を言葉で殺した。それも、掛替えのない親友を。

終わりの夢 22

その夏が終わるのを待って、僕は沖繩を出た。しばらくして、今村の母親が亡くなった。その一周忌を終えた後、今村は自ら命を断った。そういうことを、僕は和美からの手紙で知った。彼女とも、それきりだった。

僕が、今村を死なせた。彼はまだ、二十歳を過ぎたばかりだったのに。『終わりの夢』は全て処分した。

彼のことはすいぶん考えた。もし僕との一件がなかったとしたら。そしてそこから導き出される彼の未来の、ありとあらゆるパターンを考えた。彼を死に追いやってしまったという苦しみから逃れたかった。遅かれ早かれ、彼は死ぬ運命にあったのだ。俺のせいじゃないと思いたかった。

【発病の確率は五十パーセント、五分五分だ。彼は健康のう

ちに寿命を全うできたのかもしれない】

しかし結局、僕の堂々巡りはそこに行きつき、犯した過ちの大きさを知るのであった。

やがて僕は、一つの罰を自分に課した。それはこの先、他人に対して決して怒らないということだった。今村を死なせた、この単純で悪魔的な怒りという感情を葬り去ることが、彼に對しての償いと思いたかった。

僕はもともとが短気な性格だった。だから他人との接触の中でしばしば生じる怒りの衝動を、封じ込めるのはとても苦しかった。しかし、苦しければ苦しいほど、償いに値すると思つた。

そんな中で、絵里、僕は君に逢つた。

人生というのはやり直しがきくものだ、君は僕に思わせってくれた。君は僕に色々な夢を持たせてくれた。君は僕に……いや、もうそう。難しいね、言葉を尽くしたいのだけれど、二十年も一緒に過ごした君の前で、言葉は何て無力なんだろう。

結婚前に、僕がまた沖繩へ行ったのは、今村に逢う為だった。彼の墓に初めて行ってみた。母親と彼の、二人の名前が刻まれていた。僕は毎週そこへ行き、手を合わせた。僕なりのけじめだった。

そして僕は君と結婚した。僕の日々は、今村から遠ざかっていった。今村は死んだという事実の前で、僕が出来ること

はもはや何も無いように思えた。

君といると、僕は静かに息ができた。穏やかに眠れた。心地いい朝を迎えられた。全ては時が解決してくれるものと思じた。いや、信じようとしていた。

僕が「解決」という時、それは「忘却」だった。僕が忘れれば全ては解決するのだと、そう思っていた。

でも、記憶というのは、全てが薄れていくものではないんだね。時と共に濃くなってくる記憶があるなんて、その頃の僕には想像も出来なかった。

終わりの夢 23

絵里、今更こんなことを言うとは君は笑うだろうが、絵を描きたいなんて希望は、今村の墓へとくに埋めてきた。それでも、君の前では夢のある人間を演じたかった。君がそういう僕を望んでいるように思ったから。誤解しないでくれ、君の為にそうしたというわけではない。君の好む僕を、僕が演じたかったただけだ。二十歳の時に失った「幸福」を、君を通して取り戻したかったのかもしれない。

けれども現実には味方してはくれない。今村の記憶が濃くなっていくのと、酒の量が増えていくのと、どっちが先だったんだろう。互いに寄りかかりながら、擦りつけあいながら、どんどん大きく膨れ上がっていった。

今村を死に追いやった罰として、僕は他人に対しての怒り

を自らに禁じた。そのことが、時と共に僕を、文字通り「罰して」いたんだと思う。

封じ込められた怒りが出口を探して、辿りついた場所が「酒」だったんだよ。僕は酒酔いに便乗して、禁止していた感情を解き放つ。そして翌日にはこう言うんだ。やあ昨日は悪かったね、酔っ払っちゃったもんだから申し訳ない、とね。日本には無礼講なる有難い風潮があつて、そう言っていれば、ある程度は水に流してもらえた。そう、はじまりは、「ある程度」だったんだ。

酒はまた、今村を思い出させた。仕事が終わった後、二人で安いウイスキーを飲み交わしながら過ごした時間が、どれだけ大切なものだったことが。

(もし俺が、少しでもおかしいと思つたら言ってくれ)
(言つてどうなる)

(死ぬさ、決まつてるじゃないか 判断力を失う前にな。だから、必ず教えてくれ)

(君を殺す手助けか？ 殺人者としての俺の未来はどうなるんだ)

(大丈夫だ、俺が天国でお前を守つてやるさ)
そんな会話の一つ一つが思い出される。

天国で守つてやる。彼はそう言ったのだ、守つてやる、と。そついう奴だった。

今村を思い出したくて酒を飲み、忘れたくて酒を飲んだ。

多くの友人を失い、仕事に差し支えるようになってきた。どこかでこの連鎖を断ち切らなければ、俺はこのまま終わりだと、頭ではいつも理解していた。そしてまた、俺は終わりと酒を飲んだ。

君が僕をどう見ているのかは分かっていて、当然だ、仕方ない。しかしまた一方で、僕は覚えていた。君を守ってやると、約束したことを。

終わりの夢 24

自分が今、何をしなければならぬか、僕にはよく分かっていた。分かっていながら、一日伸ばしにしていた。何かが僕を押してくれるのを待っていたのかもしれない。情けないけど、それが事実だった。

でも、そこから出るきっかけを、絵里、君がくれた。

僕は夢をみたんだよ。そこには、出会った頃の勝気そうな二十歳の君がいた。僕たちは、死んだ犬の埋葬を終えたばかりだった。

(意味なんかないよ。生まれて、死ぬの。それだけのことでしょ)

人の一生に対して、君はそんなふうにした。強い言葉を、無理やり押し出すみたいにして。

君は答えを待っていた。ありきたりでもいい、自分を解きほぐしてもらえようと言葉を、君は欲しがっていた。そんな

な頑なな二十歳の絵里の心が、僕にはよく分かった。でも、何も答えてやるのが出来なかった。答えられなかった。僕の中には、答えられる何物も存在しなかった。からっぽだった。

だから僕は、仕方なく言った。

(ずつと、寂しかったんでしょ)

出会いの初めから、僕には君がそう見えた。

(どうしてそんなこと言うの?)

二十歳の君は、泣き笑いの表情を浮かべた。

(そう見えるから)

(どんな時?)

(黙っていても、喋っていても、笑っても、今みたいに泣きそうな時も、いつも……) そこで目が覚めた。

僕の隣で、あれから二十年経った君が、静かに寢息を立てていた。それを聞きながら、僕はこれまでいっただい君に何を与えられたのだろうか、朝までずっと考えていた。君を守ってやると約束したのだ。しかし思い浮かぶのは、君から奪い取ったものばかりだった。そんな堂々巡りに苦しくなると、いつものように酒を飲もうとした僕に、ふいにある考えが浮かんだ。

二十年という間、それでも絵里は僕の隣でこうして眠っている。こんな僕の隣で。これは一つの奇跡だ。そう思った時、今村の言葉が思い出された。

(大丈夫だ、俺が天国でお前を守ってやるさ)

そうか、今村はずっと前から来てくれてたんだ。そして、こんな奇跡を与え続けてくれていた。

僕は酒を飲もうとする自分を押し留めた。

今村が僕を助けてくれた。そう信じられた。

絵里、改めて君に伝えたい。

『ぼくは終わりの夢にいる』

僕は今、救いの場所に来ている。

終わりの夢 25

僕は今、海のそばのペンションにいる。オーナーは昔の同僚だから、こんな半病人でも無料で住み込ませてくれている。食事とベッドの分くらいは働こうと思っただが、最初のうちはそれも出来なかった。僕はここから病院に通っている。酒を断つ為の治療を受けているんだ。断酒を決意した時、入院も覚悟したのだが、この程度なら外来治療でいきますか、と言われてほっとした。一応、三ヶ月を目安にしてくださいと、先生には言われている。

最初の一週間はとても長かった。でも一週間過ぎたら、朝飯が食べられた。いつも手足ががっつたるくて重かったけれど、それが取れた頃から、少しずつペンションの方も手伝い始めた。

病院が主催するミーティングにも、定期的に参加している。

断酒会そのものはよく知られているけれど、やっぱり実際に参加して体験談を聞き、体験を語る、というのは、最初とてもきつかった。でも今では、何人かの断酒仲間もできたよ。

人の話に耳を傾け、自分を語りながら、今更ながら、

僕は君にいい人生を与えられなかったと悔やむ。いや、こういう言い方は傲慢だね。互いにいい人生を築けなかった、というべきか。それも、僕のせいだね。

僕という人間がいなければ、今村はあんな死に方をせず、君も幸福な人生の中にいたかもしれないのに。

いや、もうよそう。

僕がここに来たのは、こういう行き場のない思いから出るためではなかったか。僕はもう十分苦しんだ、君を苦しめてきた。

それでも君は、ずっと僕のそばにいてくれた。こちらは何度か、別れを切り出しているというのに。そこには君の意思があったと、僕はそう考えたいんだ。その事実、自分が存在することの意味を見つけられる。

君は今、これを読みながら、何を思っているのだろう。あるいは僕は、ずいぶん的外れな考え方をしているのだろうか。君の気持ちを知りたい。

少し前、オーナーからブリペイド式の携帯電話をもらった。宿泊客が忘れていった物で、そちらで処分してくれと言われたらしい。僕にはあまり必要ないものだから、取り敢えず部

屋に置いてある。このケータイの有効期限は、あと七ヶ月だと言われた。

もしも君がこの先、僕を必要としてくれるなら、ここに電話をくれないか。七ヶ月間待っている。電話がなかったら、それが君の答えと解釈して、以後僕からは連絡しないよ、安心してくれ。

ずいぶん長い手紙になってしまったね。最後まで読んでくれたことを信じて。ありがと、絵里」

終わりの夢 26

寛からの長い手紙を、絵里は繰り返し繰り返し、何度も読み返した。そして自分はいったい、彼の何を見て何を知っていたのだろうと、改めて思った。手紙にあつた夢の話、あれは実際に二人が交わした会話だった。

人の一生に対して、(生まれて、死ぬの。それだけのことでしょ)と言いつつ自分に、夢の中の寛は何も答えられなかったと書いている。

しかし絵里は覚えている。あの時、寛はこう言った。

(でも、生まれる、と、死ぬ、の間で人は生きるんだよ、それを無視することが、君は出来るの？ 今生きている現実と、きちんと向き合ってるのかい？ それで生きてるっていえるのか？ ただ、苦しみから逃げているだけじゃないのか？)

あれは彼が、自分自身に向けた言葉だった。今頃になって

分かるなんて。寛はずっと、そういう苦しみの中にいたのだ、たった一人きりで。

そう考えると、絵里はとても辛くなる。寛が持っている孤独さに惹かれ、共感し、それが自分たちを結びつけたはずだった。二つの孤独は一つになって、二人の心で癒せるはずと、そんな思いもあったはずなのに。いつしか孤独はまた二つに分かれ、互いの中に沈み込んだ。そして絵里は、寛の中に沈んでいったものがあることすら、ある時から忘れたふりをしていた。

絵里は電話を取上げて、手紙の最後に記してある数字を、ゆつくりと押した。発信音が鳴る。一回、一回、……五回目が鳴ったところで、受話器が取られた。「はい」

寛の声だ。まるで耳元で囁かれているように、とても近くで響いた。

「もしもし？」

不審げな寛の声。

絵里はその声に耳を傾ける。

海のそばのペンションと言っていた。波の音が聞こえるような気がする。

「絵里か？」

声のトーンが変わった。

返事の代わりに、絵里は少し笑った。

「絵里か……」 声にふっと安心感が入り込んだ。それが絵

里の耳まで届き、安心が身体の中を一巡りした。

電話の向こうで、寛が微笑んだ気がした。

「ありがとう」

声と言った。耳の中に、低く響いて広がっていく。

その心地よさに、絵里はまた、小さく笑った。

完